

京都府名誉友好大使レポート集



2025年4月

京都府国際課

目次

※名前またはタイトル部分をクリックすると、該当ページにリンクします。

<small>シュウ トクケン</small> 修 徳健「出身地のご紹介」	1
(平成5年度任命・山東省出身・青島市在住)	
<small>ショウ シンウ</small> 邵 振宇「120年前の日本学者が撮った西安」	3
(平成18年度任命・陝西省出身・西安市在住)	
<small>タン ネイ</small> 単 寧「朋あり遠方より来たる、また楽しからずや」	5
(平成18年度任命・山東省出身・神奈川県在住)	
トーレス ミヨシ マキ ソチル「メキシコでの日系コミュニティ」	6
(平成20年度任命・メキシコ出身・メキシコ在住)	
<small>リン イョウ</small> 林 依蓉「雪の京都」	8
(平成21年度任命・台湾出身・京都市在住)	
ザオプトラ アントニウス アンドレ「外国人の在り方」	10
(平成26年度任命・インドネシア出身・大阪府在住)	
ドゥガール アレクサンドリア メリー 「ハリファックス市のパブリックガーデンの冬のイルミネーション」	12
(平成26年度任命・カナダ出身・東京都在住)	
<small>ナン キョウケイ</small> 南 玉瓊「黒竜江省における少数民族の文化について」	14
(平成26年度任命・黒竜江省出身・東京都在住)	
ガラス セゲル ハビエラ クリスティナ「サンティアゴ・デ・チリ」	17
(平成28年度任命・チリ出身・京都市在住)	

<small>シン カメイ</small> 沈 家銘 「台湾と京都の新年」	19
---	----

(令和28年度任命・台湾出身・大阪府在住)

アッスガイル アシール 「2025年は手工芸の年」	22
----------------------------------	----

(令和30年度任命・サウジアラビア出身・埼玉県在住)

サブーナス アウドリュース 「リトアニア語と日本語—驚きの共通点—」	24
---	----

(令和元年度任命・リトアニア出身・東京都在住)

ヨウ ガイン
楊 雅韻

「京都と泉州における伝統継承モデルの比較—家元制度と宗族ネットワークを例に—」	26
---	----

(令和3年度任命・福建省出身・京都市在住)

<small>リ ハン</small> 李 帆 「古文書学習の感想」	28
--	----

(令和3年度任命・山西省出身・大阪府在住)

<small>チョウ ゲツ</small> 張 玥 「千年前の中国『東京』を歩く：開封・清明上河園の旅」	30
--	----

(令和4年度任命・河南省出身・東京都在住)

<small>ユン スヨン</small> 尹 粹娟 「日本留学の契機：京都」	33
---	----

(令和4年度任命・韓国出身・京都市在住)

<small>リ マツ</small> 李 沫 「文化の伝承」	34
---	----

(令和4年度任命・河北省出身・京都市在住)

<small>オウ エンヨウ</small> 王 艶蓉 「追憶・井手町」	36
--	----

(令和5年度任命・遼寧省出身・京都市在住)

<small>ソン シン</small> 孫 鑫 「西田幾多郎の故郷をたどる」	38
---	----

(令和5年度任命・山東省出身・東京都在住)

ホウ ユイイツ 彭 唯一 「異文化を尊重できる元とは何か」	40
(令和5年度任命・山西省出身・京都市在住)	
マイ アイン トウ「京都の神社研修を経て」	41
(令和5年度任命・ベトナム出身・京都市在住)	
モウ カキ 毛 嘉琪 「人生の柱」	43
(令和5年度任命・江西省出身・京都市在住)	
ロー ジン チョン「果物の王様：ドリアン」	45
(令和5年度任命・マレーシア出身・京都市在住)	
エン ケイケイ 袁 啓慧 「京都と上海：異文化の交差点としての観光と交流」	48
(令和6年度任命・上海市出身・京都市在住)	
オウ スイ 王 子懿 「名誉友好大使としての活動に関する考察と今後の展望」	51
(令和6年度任命・台湾出身・京都市在住)	
カン ウキン 咸 雨欣 「名誉友好大使として活動する中で考えたこと、感じたこと」	55
(令和6年度任命・遼寧省出身・京都市在住)	
チエ ヘリン 崔 惠隣 「異文化へのつながり」	58
(令和6年度任命・韓国出身・京都市在住)	
チャン ティ ツック リン「ベトナムの言語について」	59
(令和6年度任命・ベトナム出身・京都市在住)	
バク ジヘ 朴 智恵 「韓国人にとって京都とは：遺産観光の観点から」	61
(令和6年度任命・韓国出身・京都市在住)	
バク セツバイ 莫 雪梅 「大使活動を通して得た体験」	62
(令和6年度任命・四川省出身・京都市在住)	

<u>ハミド アブドゥル ファウザン「人と出会い、視野を広げる」</u>	64
(令和6年度任命・インドネシア出身・京都市在住)	
^{ホン} <u>洪 サラン「韓国の社会問題：自殺にどのように向き合うべきか</u>	65
(令和6年度任命・韓国出身・京都市在住)	
<u>モー テツ シン「名誉友好大使として活動する中で考えたこと、感じたこと」</u>	67
(令和6年度任命・ミャンマー出身・京都市在住)	
^リ ^{ミン} <u>李 明「故郷の味」</u>	70
(令和6年度任命・山東省出身・京都市在住)	
^{リョウ} ^{ウトウ} <u>梁 雨桐「南昌と京都：異なる歴史、共通する魅力」</u>	72
(令和6年度任命・江西省出身・京都市在住)	

※居住地は令和7年3月現在

<出身地のご紹介>

氏 名：修徳健（シュウ トクケン）
任 命 年 度：平成5年度任命
出 身 地：中国山東省青島市
在 住 地：青島市在住



私の出身地である青島は近年、目覚ましい発展を遂げています。特に観光産業は、経済基盤の一つとして目に見えて変貌してきています。

伝統的で名高いビールの町に加えて、映画の町（多くの映画のロケ地）、ヨットの町（2008年北京五輪のヨットの競技場）として開発が進められ、日増しにその魅力を高めてきて世界各地からの観光客をひきよせています。

ここで、伝統的なところに少し変化が見られるところを二つ紹介してみましよう。

● 棧橋の冬

青島は、美しい海岸線や歴史的な建造物、ビールなどで知られる観光都市です。その代表的な観光スポットの一つである棧橋の周辺には、越冬のため、シベリアからカモメ（紅嘴鷗が中心、以前も少しあったが、数が少なかった。）が大勢で集まってきて、これまでにない大きな賑わいを見せており、青島湾を埋め尽くすほどその氣勢には圧倒されます。

カモメたちが鳴きながら、湾内を飛翔するその優雅な姿を一目見ようと、人々は相次いで開通した、市内を縦横に走る地下鉄（現在までのところ、あわせて8本の線路が開通したという。）に乗って、棧橋にやってきます。冬の棧橋では、人とカモメとの共生した時空間が作り出されています。カモメに餌をやりながら、直に触れ合うことができるため、青島を訪れる観光客にとって、心温まる絶景として強く印象に残され、棧橋の新しい魅力として、ますます人気を集めていくかと思えます。

● 名物料理の「アサリの辛炒め」

青島の名物料理といえば、「アサリの辛炒め」がよく知られます。料理の素材は地元で獲れる紅島の“花蛤”です。

紅島は、膠州湾に面しており、アサリの生息地として有名です。そこで獲れるアサリはサイズは小柄ですが、身はふっくらとしていることが特徴です。また、膠州湾独特な環境の影響からか甘みや旨みが豊かで、身がやわらかくジューシーなところが評判です。そして、何と言っても、その新鮮さです。獲れたてのアサリはその日のうちに食卓に届けられ、風味豊かで、磯の香りや海の塩気を存分に楽しむことができます。

青島方言ではアサリのことを「gala」（漢字で「蛤蜊」と書く）といいます。先ほどの「アサリの辛炒め」は、「辣炒蛤蜊」といって、新鮮なアサリを主な材料に、殻ごと炒められ、唐辛子を加えるだけで出来上がり、それほど手が込んだものではありません。ピリッとした辛さがアクセントとなり、ニンニクや生姜の風味で料理全体を引き締めるのは近年、四川料理の影響があったかと思いますが、一風変わった風味になって名物料理として人気が高いです。（店の看板料理などによっては多少の違いがある。伝統的な作り方としては、素材の味そのものを大切に唐辛子を使わない。）これに有名な青島ビールと組み合わせるコンビが生まれ、地元の人たちにこよなく愛され、また、各地から訪れてくる人々を楽しませています。よく考えてみれば、このように簡単にできる名物料理が他にあるでしょうか。最近になって、このアサリを主な素材にした様々な料理が工夫され、新しい魅力として美食家たちを楽しませています。

皆様のご来訪を心待ちにしております。

<120年前の日本学者が撮った西安>

氏 名：邵 振宇（ショウ シンウ）
任命年度：平成18年度任命
出身地：中国陝西省
在住地：中国陝西省西安市在住



私は平成18年度に任命された京都府名誉友好大使邵振宇(ショウ シンウ)です。2009年中国に帰国し、出身地陝西省の歴史遺産保存と観光計画の仕事をやりながら、国際記念物遺跡理事会のメンバーとして、シルクロードの研究もしています。

私の出身の町は陝西省の省都である西安です。この古称は長安であり、かつては鎬京、西都、西京、大興、京兆、奉元等とも称されました。古代より政治の中心地として西周から秦、漢から隋、唐の都城と十三の王朝の都として二千数百年の歴史を有す古都であります。1369年(洪武2年)、明朝は元朝の奉元路を廃止し西安府を設置、これが西安の名称の初見です。清朝の時、西安府の府庁所在地を西安城と改称されました。中華民国になって、1928年、西安に初めて市制が施行され省轄市としての西安市が成立しました。中華人民共和国成立後は延安に代わって陝甘寧辺区の首府となり、西北行政区轄市、中央直轄市、計画単列市と改編が続き、1954年に陝西省の省都、副省級市となって現在に至っています。

清朝の末から21世紀の間に中国では大きな変革が発生しました。西安の街並みも大部変わりました。幸いにも、数名西安に来た外国人はカメラで清朝末の古い西安の様子を撮りました。その中で、日本の足立喜六は貴重な記録を残しました。



足立喜六が撮影した西安城南門（永寧門）
(出典：『长安史迹研究』（三秦出版社，2003年）)



現在の西安城南門（永寧門）
(出典：[西安南门](#) 百度图片搜索)

1906年(明治39)年から4年間、35歳の足立喜六は中国政府の招きで陝西高等学堂の数学、物理の教師として西安市に滞在しました。この時、足立喜六は西安にある遺跡を実地踏査し、その記録をまとめあげました。彼は写真を撮る事だけではなく、自ら測量事もおこない、記帳な資料を集めました。

足立喜六が教職をした陝西高等学堂は現在の西北大学の前身で、清朝晩期に中国西北地区の高等教育の起源となりました。1902年、光緒皇帝は陝西大学堂開設に関する申請書類の上に、「著即督饬、認真办理、务收兴学实效、单并发」と書きました。1901年、西安城内の

東考院と西安府崇化書院の跡地で陝西大学堂を建設しました。当時の教習は3種類で構成され、一部は清朝の進士で、一部は海外留学生と国内大学卒業生で、一部は外国籍教育です。日本からは鈴木直、足立喜六などの教員がいました。幾つの陝西大学堂の学生は卒業後、国内の分科大学に進学し、海外に留学しました。その中に、銭鴻鈞は日本の早稲田大学に行って、中国帰国後に西北大学の学長を務めました。



足立喜六が教職をした陝西高等学堂

出典：[校史时光机 | 外国人眼里的陝西高等学堂（附10月14日志愿讲解安排）](#)

日本に返った後、足立喜六は『長安史跡の研究』という本を、昭和8年に東洋文庫から発行されました。図や見取り図はすべて足立氏が記録し、写真のほとんども持参した暗箱カメラ、ガラスの種板で撮影したものであり、広範囲にわたる遺跡の詳細な記録は今なお、長安史研究に欠くことのできない著作になっています。

<朋あり遠方より来たる、また楽しからずや>

氏 名：単 寧（タン ネイ）
任 命 年 度：平成18年度任命
出 身 地：中国山東省
在 住 地：厚木市在住



先日、大学時代の友人と久しぶりに横浜で再会しました。彼はタイ出身で、修士課程で出会い、共に研究に励んだ仲です。卒業後、彼はタイに帰り、立派な会社経営者になりました。普段はなかなか会う機会がありませんでしたが、今回、仕事で日本に来ると聞き、久しぶりに会うことになりました。

横浜駅前の店で、おいしい食事をしながら、大学時代の思い出話に花が咲きました。借りた四畳半の狭い部屋で夜遅くまで研究に没頭したこと、仲間たちと分け合った小さな誕生日ケーキ、先生に叱られながらも必死で課題に取り組んだこと——どれも懐かしく、まるで昨日のことのよう思えました。あの頃は毎日が忙しく、大変だと感じることも多かったですが、今振り返ると、すべてがかけがえのない青春の一ページだったのだと気づきます。

彼とは卒業後も連絡を取り合っていました。実際に会う機会はとても少なかったです。それでも、顔を合わせた瞬間、まるで時間が巻き戻されたかのように、昔と変わらない関係に戻ることができました。こうして再会し、変わらぬ友情を確かめ合えることが、どれほど幸せなことかを実感しました。

さらに、彼は今度京都で新たなビジネスを始めることを考えているそうです。その話を聞いたとき、私は心からうれしくなりました。日本でまた彼と会う機会が増えるかもしれないと思うと、これからの再会がますます楽しみになります。

「また今度、京都で会いましょう！」

そう約束して、私たちは別れました。友人は最高の宝物です。遠く離れていても、こうしてまた笑い合える時間があることに感謝しながら、私は改めてこの言葉の意味をかみしめました。

「朋あり遠方より来たる、また楽しからずや。」

＜メキシコでの日系コミュニティ＞

氏 名：トーレス・ミヨシ・マキ・ソチル
任 命 年 度：平成20年度任命
出 身 地：メキシコ
在 住 地：メキシコ在住



メキシコ出身のトーレス・ミヨシ・マキ・ソチルです。以前、一度紹介させていただいておりますが、私はメキシコ生まれ育ちのいわゆる日系二世です。母は日本人で、メキシコ人の父と結婚し、メキシコへ移住しました。そこで、私が生まれました。幼い時から私みたいな日系の方と関わってきましたので、そこまで特別なことだと感じていませんでした。とは言いつつ、幼い時から日系であることで、日本との懸け橋になれるよう、夢見ていました。話せば長くなるので、色んなことを試したり、経験したりした結果、今に至っています。今に至っていますとは言いながら、これが私の最終的なゴールではないとは信じています。では、今に至っていますというのは、話がずれるようですが、今1歳4か月の赤ちゃんがいます。出産を機に会社を辞め、子供に専念することを決意しました。そこで、やっと子供に専念だけではなく、私の夢全体的に専念することにしたい方いいと思います。と言いますと、子供をもつのは私の一つの夢でした。そして、先ほど言ったように、日本との懸け橋になるというのも私の数多い、もう一つの夢です。この夢に関してはまだはっきりとはしていませんが、少しずつ子供と一緒に作っていているような感じです。現段階では、言語を教えることから始めています。言語と簡単にまとめていますが、私は言語を教えるにあたって、言葉だけではなく、文化も教える義務があると考えています。文化なしではその言語はちゃんと理解できないと思っています。日本母語者以外の方、主にメキシコ人に日本語を教えたり、こちらに住んでいる日本人にスペイン語を教えたりしています。これは一方でやっていることですが、もう一つの今力を入れている活動としては、日系コミュニティを作ることです。と、偉そうに聞こえますが、実はいろんな状況等が重なって、たまたま私にも声がかかってき、いいタイミングだったので、積極的に参加、協力させていただいているような感じです。

さて、今日はこの日系コミュニティの活動に関して少し話していきたいと思っています。先ほど言いそびれましたが、私はメキシコのアグアスカリエンテスという町で暮らしています。出身はグアダハラハラという、車で三時間ほど離れているところですが、訳あり、アグアスカリエンテスに来たのは10年ほど前でした。ここは着いた日から運命を感じ、今後はここで暮らすでしょうと感じました。今もそう思っています。が、人生は何があるかわからないので、絶対とは言いきれません。話を戻しますと、アグアスカリエンテスは30年以上前から日産自動車の工場が来たことにより、日系コミュニティが豊かです。2, 3

年出張等で来る日本人も多いですが、暮らしている日系の方々も人口のわりにメキシコでは多い地域だと思います。この、日系とのかかわりが深そうに思えるアグアスカリエンテスにもかかわらず、日系コミュニティが今までなかったようです。ちなみに、メキシコの主な都市、メキシコシティ、モンテレイ、グアダハラ等では昔からあるようです。そこで、何かをきっかけに、日系コミュニティを作ることになったのはちょうど去年のことです。そこで、日本大使館、他の日系コミュニティの協力を得ながら、数人の日系が集まって、このコミュニティを作り上げていこうとしています。去年は「桜祭り」、「秋祭り」と言う、日本の文化を紹介できるようなイベントを開催し、今年は政府との協力で、アグアスカリエンテス市の祭り、メキシコで最大祭りである、サンマルコス祭りで日本の文化を紹介できる場を設けていただけになりました。まだまだ始まったばかりで、行き当たりばったりですが、楽しみながら、いいコミュニティを作れるよう頑張っています。今後はもう少し詳しく活動が紹介できるように頑張りたいと思っています。



<雪の京都>

氏 名：林 依蓉（リン イヨウ）
任 命 年 度：平成21年度任命
出 身 地：台湾台北市
在 住 地：京都市在住



茶道・美術書籍に特化した出版社「淡交社」の文化事業部に勤め、早くも七年目を迎えました。普段の仕事では、茶道を軸とした文化教室、茶会、茶の湯の旅などの企画・運営を担当しています。今年の京都市内は、例年に比べて雪が降る頻度が多い一年となりました。そんな珍しく非日常的な雰囲気の中で、心を打たれた出来事をお伝えしたいと思います。



仁和寺の雪景色

2月の上旬、世界遺産・仁和寺の重要文化財茶室「遼廓亭」にて、文化財をいかに活かすかという試みとして、モニター茶会を開催しました。大雪が降りしきり、静寂な雪景色を織りなしていました。しかし、その美しさとは裏腹に、茶会の準備には一層の困難をもたらしました。それでも、お寺の方々やお茶の先生とはいつも一緒に運営をする仲間であり、大雪による人手不足の中でも、私たちは息の合った動きで忙しく立ち回りました。不思議なことに、疲れを感じることはなく、むしろ心が温かく満たされていました。



庭師の後ろ姿



主菓子「雪餅」老松製

席入りの直前、庭師のおじいさんが心を込めてお客様の歩く道を掃き清めている姿を目にしました。私は思わず駆け寄り、お礼を伝えました。その心遣いに深く感動しました。後に、水屋の方から聞いた話によると、実は昨日の時点で皆、翌日大雪になることを予想しており、掃除が無駄になる可能性もあると分かっていました。それでも、庭師のおじいさんは茶室の周りを丁寧に掃除していたのです。

私はいつも、こうして静かに支えてくださる方々の姿に胸を打たれます。彼らの心には、まるで目に見えない物差しがあるかのようで、常に自分の力の及ぶ限り最善を尽くそうとしています。そのひたむきな努力があるからこそ、完成度の高い「おもてなし」を提供できるのだと、改めて気づかされました。

＜外国人の在り方＞

氏 名：ANTONIUS ANDRE ZAOPUTRA
（アントニウス・アンドレ・ザオプトラ）
任 命 年 度：平成26年度任命
出 身 地：インドネシア
在 住 地：大阪市在住



本日2月2日、節分の日です。いつものように買い物をし、ついでにデパ地下で美味しそうな恵方巻を買って帰りました。街中を歩くと、さまざまな場所で恵方巻が並んでいます。寿司屋はもちろん、スーパーやコンビニも負けていません。従業員全員が必死に売り込みをしていました。その中に、外観から見て明らかに若い外国人アルバイトもいて、年に一度の「お祭り」に参加しているようでした。私はその一瞬の風景を見て、「今の日本は人手不足が深刻なんだな」と感じました。

さて、本題に入りますが、2025年に入って早々、世界的にさまざまな出来事が起きています。その中でおそらく一番大きな話題は、「マタトラ（またトランプ大統領が誕生）」でしょう。就任早々、次々と大統領命令を出し、その中には違法入国した外国人を逮捕・送還する命令も含まれています。トランプ氏は、「アメリカ人の仕事を奪い、犯罪率を上げて悪影響を及ぼしている」として、アメリカを救うためにこの措置を取ると述べています。正当な在留許可を持たない違法外国人は順次逮捕され、その瞬間、アメリカン・ドリームがすべて泡となりました。

私は違法外国人を正当化するのは間違っていると思います。アメリカだけでなく、日本にも同様の法律が適用されるべきだと考えています。ただし、なぜアメリカには外国人に対するヘイトが生まれたのか、考えるとおそらく、国民全員が外国人に対して不信感を抱くような背景があるのでしょう。

私はインドネシアから日本に来て留学し、一生懸命勉強して、頑張って仕事に就いています。まだ「成功者」とは言えませんが、何とかしがみついて日本社会で生き残っている一人です。私以外にも何十年も日本で「ジャパニーズ・ドリーム」を掴んだ外国人がたくさんいます。

話は少し変わりますが、皆さん、外国人が日本で永住権を取得するのはかなり難しいことをご存知ですか？簡単に言うと、最低でも日本に10年以上継続して住んでおり、そのうち5年は納税していることが求められます。つまり、就職して安定した収入を得ることが条件です。言うまでもなく、犯罪歴がなく、

文化やルールを守り、素行が良好であることも必須です。簡単に聞こえるかもしれませんが、実際にその状態に達するまでには、書類上では分からない苦労やエネルギー、時間、費やしたお金、時には涙も流したこともあります。それくらい「ジャパニーズ・ドリーム」を掴み取って、安心して暮らせることは簡単ではありません。

たまに日本のテレビで、経済的・社会的に圧迫されて、闇バイトに手を染めてしまった日本人や外国人の若者が報道されると、胸が痛くなります。日本という優しくて住みやすい国に住むことが「当たり前」だと思っている人は、ぜひ一度、想像してほしいのです。貧困や戦争、政治の混乱によって分断された多くの国々で、自分が生きていて、逃げたくても逃げられない状況に囲まれたら、何をしますか？おそらく、今この文章を読んでいるあなたは、日本にいて、少しでも平和で豊かな生活を送っていることでしょう。しかし、それは「当たり前」ではなく、私に言わせてもらおうと「権利」です。「権利」を得るためには、「責任」を果たさなければなりません。

さて、私を含め、ほかの国に住んでいる外国人にとっての「責任」とは何でしょうか？それは、一生懸命勉強し、一生懸命働くことです。時には嫌なことをされ、上司や顧客に怒鳴られることもあります。それでも一生懸命しがみつき、良好な国民として振る舞うことです。日本の秩序を乱さず、この社会に微力ながら貢献することが、私が考える「外国人の在り方」です。

ぜひ皆さんも、良好な国民として一緒に考え、周りに良い影響を拡散していきましょう。それでは、恵方巻をいただきます。

＜ハリファックス市のパブリックガーデンの冬のイルミネーション＞

氏 名：ドゥガール・アレクサンドリア
任 命 年 度：平成26年度任命
出 身 地：カナダ
在 住 地：東京都在住



(私が撮った写真です。)

日本の冬の大好きなことはイルミネーションです。クリスマスが大好きでイルミネーションを見ると私はクリスマスを強く感じます。今考えると、印象に残りましたのは特に東京の目黒川の桜みたいな可愛いピンクのイルミネーションと六本木の白い、あと渋谷の青いイルミネーションです。大変感動しました！とても綺麗でした。

ところで、カナダのノバ・スコシア州のハリファックス市にはパブリックガーデンがあります。1836年に立って、1984年にカナダ国定史跡に指定されました。特に夏と春は花と緑がとても綺麗です。ハリファックス市の人々はガーデンで散歩をしたり、昼ごはんを食べたりするのが大好きです。

しかし、ここ数年で冬にはガーデンの雰囲気が変わっています。「ホリデーライト」という12月の色々のホリデーのために11月末から正月ぐらいまでのイルミネーションが始まりました！

今年イルミネーションが始まってすぐに私は見に行きました。結構綺麗でしたが、今年クリスマス直前に雪が降りましたのでホワイト・クリスマスになり、クリスマスデー（12月25日）の夜にまた散歩のためにパブリックガーデンに行きました。雪とイルミネーションは最高でした！とても印象に残りました。

来年また見られたらいいと思います。来年もホワイト・クリスマスになるのでしょうか？

<黒竜江省における少数民族の文化について>

氏 名：南玉瓊（ナン ギョクケイ）
任 命 年 度：平成26年度任命
出 身 地：中国黒竜江省
在 住 地：東京都在住



1. はじめに

現在、中国には計 56 の民族が認定ⁱされており、その中で少数民族と呼ばれる民族は 55 ある。黒竜江省にも少数民族は 55 あり、人口は約 112 万人で、黒竜江省の全人口の 3.52%を占めているⁱⁱ。本レポートでは黒竜江省における少数民族の概況を紹介し、一部少数民族の文化を紹介する。

2. 黒竜江省の少数民族の概要

黒竜江省に世居する少数民族は、満州族、朝鮮族、モンゴル族、回族、ダウール族、シボ族、ホジェン族、オロチョン族、エヴェンキ族、キルギス族の 10 の民族である。そのうち、満州族、朝鮮族、モンゴル族の 3 つの民族は人口が 10 万人を超え、回族は 7.5 万人、ダウール族は 3.4 万人である。その他の 5 つの民族の人口はすべて 1 万人に満たない。黒竜江省に唯一存在する民族であるホジェン族は、現在 3,805 人が生活しているⁱⁱⁱ。

表 1 黒竜江省に世居する少数民族の人口

	黒竜江省における人口（単位：人）
満州族	583,807
朝鮮族	270,123
モンゴル族	112,210
回族	75,464
ダウール族	33,670
シボ族	6,259
ホジェン族	3,805
オロチョン族	3,236
エヴェンキ族	2,560
キルギス族	1,186

出所：中国統計出版社「1-4 各地区分性別、民族的人口」『黒竜江省人口普查年鑑』2020 年

現在、黒竜江省には 1 つの自治県（杜爾伯特・モンゴル族自治県）、1 つの民族区（チチハル市梅リスダウール族区）、63 の民族郷鎮があり、その内訳は満州族郷（鎮）18 か所、朝鮮族郷（鎮）19 か所、モンゴル族郷（鎮）6 か所、ダウール族郷（鎮）3 か所、オロチョン族郷 5 か所、エヴェンキ族郷 1 か所、ホジェン族郷 3 か所、複数の民族が共存する郷（鎮）8 か所となっている。また、黒竜江省内には少数民族が集住する村が 725

か所ある^{iv}。

オロチョン族は長年にわたり東北地方の大小興安嶺地域に定住し、山林との結びつきが非常に強いという。オロチョン族は主に黒河市や大興安嶺地区に、エヴェンキ族は主に訥河市の興旺エヴェンキ族郷に、ダウール族は主にチチハル市や黒河市に分布している。ホジェン族は黒竜江省にのみ存在する民族であり、主に佳木斯市郊外、同江市、撫遠市、双鴨山市の饒河県などに居住している^v。

黒竜江省には市級民族文化館が4か所、県級民族文化館が9か所、民族郷（鎮）文化センターが63か所、村級文化活動室が460か所設置されている^{vi}。

3. 黒竜江省の少数民族の文化

・飲食文化

黒竜江省に世居する少数民族には、それぞれ伝統的な料理がある。ダウール族の代表的な料理として、野生のヨモギの芽を使った「菜粥」が挙げられる。オロチョン族の食文化も独特で、カモシカの肉を煮込んだ肉粥や、「方圏餅」（リング状の焼き菓子）、油面片（揚げた小麦生地のスナック）などがある。満州族の食文化の大きな特徴は、もち米を使った料理を好むことである。黄米（きび）を使ったご飯や「饽饽」（蒸しパンの一種）などが代表的で、祭祀の際にはもち米のご飯を作り、祖先に供える習慣がある。また、火鍋（鍋料理）や炖菜（煮込み料理）も満州族の代表的な食文化であり、現在では東北料理の大きな特色の一つとなっている^{vii}。

・服飾文化

オロチョン族とホジェン族の文化には、「樺樹皮文化」「獣皮文化」「魚皮文化」があり、これらは「三皮文化」と呼ばれている。樺樹皮文化は、白樺の樹皮を素材として発展した文化である。獣皮文化は、野生動物（特に哺乳類）の皮毛を素材とする文化を指す。魚皮文化は、魚の皮を加工して作られる文化を指す。この「三皮文化」は、東北地方の少数民族の独特な生産・生活様式を反映している^{viii}。



図1 白樺の樹皮で作った工芸品

（出所：譚文娟「非遺中国：樺樹皮制作技芸」『新浪新聞』2017年11月9日〔[非遺中国：樺樹皮制作技芸](#) | [樺樹皮](#) | [技芸](#) | [民族](#) | [新浪新聞](#)〕）

・無形文化遺産

ホジェン族のイマカン（伊玛堪）はユネスコ世界無形文化遺産に登録されている^{ix}。また、満州族の剪纸（切り絵）技術、ホジェン族の魚皮加工技術、オロチョン族の白樺樹皮加工技術などを含む93種目の技芸が、世界・国家・省級の無形文化遺産リストに登録されている^x。

4. おわりに

本レポートでは黒竜江省における少数民族の概況を紹介し、一部少数民族の飲食文化や服飾文化などを紹介した。実際、日本にも中国の少数民族がある程度居住しており、飲食店を営んだりする場合もあるので、飲食文化が体験できるところもある。

ⁱ 1950年代以降、中国では民族識別工作が行われ、最終的に56の民族が認定されている。

ⁱⁱⁱ 黒竜江省人民政府 [https://www.hlj.gov.cn/hlj/c108501/list_left_tt.shtml] 最終閲覧日：2025年2月28日

ⁱⁱⁱ 黒竜江省人民政府 [https://www.hlj.gov.cn/hlj/c108501/list_left_tt.shtml] 最終閲覧日：2025年2月28日

^{iv} 黒竜江省人民政府 [https://www.hlj.gov.cn/hlj/c108501/list_left_tt.shtml] 最終閲覧日：2025年2月28日

^v 桑蕾、杜清玉「民族特色+”給游客带来新奇体验」 [https://www.hlj.gov.cn/hlj/c108551/202404/c00_31723040.shtml] 最終閲覧日：2025年2月28日

^{vi} 劉明「黒竜江：振興発展絵新編」 [<https://www.neac.gov.cn/seac/c102846/201909/1136638.shtml>] 最終閲覧日：2025年2月28日

^{vii} 马冬「黒竜江少数民族文化多样性研究」 [<https://column.chinadaily.com.cn/a/202101/10/WS5ffa5abea3101e7ce9739f16.html>] 最終閲覧日：2025年2月28日

^{viii} 马冬「黒竜江少数民族文化多样性研究」 [<https://column.chinadaily.com.cn/a/202101/10/WS5ffa5abea3101e7ce9739f16.html>] 最終閲覧日：2025年2月28日

^{ix} 桑蕾、杜清玉「民族特色+”給游客带来新奇体验」 [https://www.hlj.gov.cn/hlj/c108551/202404/c00_31723040.shtml] 最終閲覧日：2025年2月28日

^x 劉明「黒竜江：振興発展絵新編」 [<https://www.neac.gov.cn/seac/c102846/201909/1136638.shtml>] 最終閲覧日：2025年2月28日

＜ サンティアゴ・デ・チリ＞

氏 名：ガラス セゲル ハビエラ クリスティナ

任命年 度：平成28年度任命

出 身 地：チリ

在 住 地：京都市在住



アンデス地方の伝統踊り。
(私が撮った写真です。)

サンティアゴ・デ・チリをご存じですか？

サンティアゴ・デ・チリは、南アメリカに位置する、チリの首都であります。そして、私の故郷です。

2024年8月、夏休みに久しぶりに帰省しました。私は約2年ごとに帰りますが、今回は特別でした。というのも、外国から来た家族を案内することになり、改めてこの街の魅力を再発見したからです。

サンティアゴは450年以上の歴史を持つ都市であり、インカの遺跡から植民地時代の教会や建物まで見ることができます。そのため、独特の魅力があります。歴史ある通りを歩いていると、偶然にもアンデス地方の伝統舞踊のパレードに出会いました。とても美しく、感動的な光景でした！

サンティアゴはチリの中央部に位置し、四季がはっきりしています。夏は乾燥し、冬は寒く雨が多いのが特徴です。また、街はアンデス山脈と沿岸山脈という二つの山脈に囲まれており、冬になると雪で覆われ、とても美しい景色が広がります。

市内にはサン・クリストバルの丘があり、そこからはサンティアゴの壮大な景色を一望できます。この丘には、高さ14メートルのマリア像があり、1908年に完成しました。チリでは地震が多いですが、この像は今もなお無傷で、街のシンボルとなっています。また、この丘にはロープウェイがあり、都市の景色を楽しむのに最適なアトラクションの一つです。私たちは雨上がりの日に訪れたのですが、雪化粧をした山々が本当に美しく、息をのむような光景でした。



マリア像
(私が撮った写真です。)



ワイナリー。
(私が撮った写真です。)

今回の帰省では、ワイナリーにも行くことができました。チリワインは日本でも有名で、国内には多くのワイナリーがあります。通常、ワイナリーは田舎にありますが、今回訪れたワイナリーは市内にあるという珍しい場所でした。もともとは田舎にありましたが、都市が発展するにつれて、街の中に取り囲まれる形になったのです。その歴史は1800年代後半に遡り、チリの近代化とも深く関係しています。興味深いことに、このワイナリーの所有者は女性であり、彼女はチリに電気を導入した最初の人物でもありました。さらに、児童労働を禁止し、働く人々の子どもたちのために学校を建設するなど、社会的な改革も進めた人物でした。もちろん、ワインの試飲も楽しみ、再び美しい山々を眺めながら素晴らしい時間を過ごしました。

私はこの文章の中で何度も山について触れました。それは、サンティアゴの最も特徴的な景観だからです。ハイキングを楽しめるだけでなく、都市近郊にはスキーリゾートもあり、雪を楽しみながら街を見渡すことができます。

私は約10年前に京都に移住しましたが、この街を囲む美しい山々にとても惹かれました。それは、まるで故郷にいるかのような感覚を与えてくれました。時々故郷が恋しくなることもあります。窓の外に広がる山々を眺めると、不思議と心が落ち着きます。



山からのサンティアゴ・デ・チリ
(私が撮った写真です。)

<台湾と京都の新年>

氏 名：沈家銘（シン カメイ）
任 命 年 度：平成28年度任命
出 身 地：台湾高雄市
在 住 地：大阪市在住



台湾では二つのお正月がある。一つは新暦のお正月、これは日本と同様1月1日に祝うが、2月にも旧暦のお正月があり、多くの人が二つのお正月を楽しみにしている。台湾人にとってはどちらも大切な祝日で、様々なイベントがある。

12月31日、台湾の大晦日の恒例行事はテレビの前で紅白歌合戦を観戦するのではなく、高さ510メートルのランドマーク台北101での花火大会とコンサートの観賞である。華やかな打ち上げ花火が真黒な夜空を多種多様な色に染める情景は、台湾の大晦日の風物詩と言えると考える。集まった百万人と一緒にカウントダウンした後、身のひきしめるような寒さの夜の中で、友達とビールを飲んだり、鍋料理を食べたりするのは本当に幸せなひと時だ。

一方、京都のお正月の風物詩は八坂神社へをけら詣りに行くことだろうか。をけら詣りには厄除と無病息災を祈願する意味があり、大勢の人が、31日から元旦にかけて八坂さんに押し寄せる。混雑を考えると少し大変だが、このような行事は新年の雰囲気盛り上げると思う。実は、台湾でも旧正月の時、定番のイベントがある。大晦日の0時から、年が明けるのを首を長くして待つ人たちがお寺（廟）の前で集まって、年が明けると同時に走り出し、お寺の石段をかけあがり、正門を潜り抜け、一番最初に線香を挿した人に一年間ずっと幸運が訪れるといわれている。陸上コンテストみたいなイベントで、時々途中で転倒してけがをする人も出る。しかし、毎年皆このイベントを楽しみにしている。

カウントダウンにしろ、お寺参りレースにしろ、台湾人は大勢の人が、いっしょに何かをして盛り上がるのが好きだ。

私の故郷台湾高雄市もそうである。高雄市は、日本でいえば大阪のような港町であり、台湾第三の都市だ。人々は親切で心が広い。大阪の人とよく似た県民性を持っていると思う。初めて大阪の天神祭を見にいった時、大阪の街の活力と踊りの迫力を感じた。上品で雅な京都祭りの雰囲気と全然違う。大阪の祭りはカーニバルみたいで、個人的には、私はこちらの方が祭りっぽいと思った。

しかし、実は京都の祭りも伝統的で雅なものばかりではない。私は祭り大好き人間として京都の祭りを見逃すわけにはいかないといい、留学時代、色々な

祭りに参加した。京都三大祭りは勿論、京大生が主催する十一月祭や熊野寮祭にも興味を持って参加した。自由の学風の誇りを持つ京都大学は学生運動と祭りが盛んだ。私は京大生のそのイノベーションに感心した。吉田南キャンパスはお化け屋敷に改装され、教室の中に、金魚すくい屋さんまである。十一月祭はまるで京大版の祇園祭りの宵山だと思う。そして、熊野寮祭は開催された際に大勢の京大生が時計台を占拠し、大きな看板をクスノキの前に立てた。何となく、1960年代の終わりに世界の各地で行われた学生ストライキを再現しているようだ。しかし、たしかにこれこそ青春だ。一年 365 日毎日祭りがある京都はどこよりも面白い場所だと思う。今年もまた、京都の祭りを心ゆくまで堪能したいと思っている。



紫南宮（台湾・南投県）



祇園祭り（日本，京都）



熊野寮祭（日本，京都）

＜2025 年は手工芸の年＞

氏 名：アッサギル アシール
任 命 年 度：平成30年度任命
出 身 地：サウジアラビア（東部・アハサ）
在 住 地：さいたま市在住



小学生の頃、祖父の庭で叔母さんと一緒に、枯れかけたナツメヤシの葉を使ってうちわを編んだ記憶があります。当時、学校で流行っていた伝統的なうちわ作りを覚えた私は、次は器作りを学びたいと、隣に座る叔母さんをお願いしたものです。



アハサ地方で生まれ育った私にとって、伝統工芸は身近な存在でした。お祝いの際に男性が着用する伝統衣装『ビシュト』

図 3 ヤシ葉のうちわ



図 2 ハサウェイビシュトの職人

は、名声や高貴な地位の象徴とされ、その仕立ては代々受け継がれてきた貴重な技術です。一般的にはウールが用いられますが、高級なものではラクダやヤギの毛が使われることもあり、袖や襟には純金や純銀の刺繍が施され、華やかさが加えられています。特に、アハサ地方のハサウイ・ビシュトは、精巧な刺繍と高品質な素材、豊かな文化遺産により、サウジアラビアの職人技を象徴する衣装として、地元のみならず国際的にも要人やエリート、ビジネスパーソンに広く支持されています。

図 1 サドウ織り

夏になると、父が用意した陶器の壺に入った適温のお水を楽しむことができました。また、デーツを乾燥させる時期になると、祖父の家には「ハシール」が敷かれていました。家族で砂漠へキャンプに出かける際は、テントが『サドウ』織りの模様で彩られ、広がるベイジュとのコントラストが、まるで温かく包み込まれるような心地よさを感じさせました。



サドウ織りは、アラビアの遊牧民が豊

かな文化遺産を芸術的に表現する古代部族の織物工芸で、代々伝承され、手織りで仕上げられるのが特徴です。さまざまな自然素材を用い、色鮮やかな幾何学模様や伝統的なデザインを織り込むことで、その地域の精神や歴史が映し出されます。特に砂漠地帯の遊牧民は、生活に欠かせない道具や装飾品、さらには住居の一部としてサドゥ織りを利用し、厳しい環境の中でその技術を磨いてきました。今日では、サウジアラビアの伝統文化を象徴する重要な工芸品として、国内外で高く評価されています。

サウジアラビアの文化省は、2020年からビジョン2030に沿い、毎年ユニークな文化テーマを設け、その魅力や意味を楽しく発信するプロジェクトやイベントを展開しています。今年「手工芸品」をテーマに、伝統技術を大切にしながら次世代へと受け継ぐことを目指しており、この取り組みは、経済の多角化と文化の豊かさを実現するビジョン2030の一翼を担い、明るい未来づくりに寄与しています。

また、こうした文化交流の一環として、昨年秋、東京では11月8日から三日間にわたり『サウジ文化の味』が開催され、日本の皆様にサウジご当地グルメを体験して



図 4 東京で開催された Marvels of Saudi Orchestra

いただく貴重な機会が提供されました。その後、ロンドンやパリで公演を重ねたサウジオーケストラが、11月22日に東京でサプライズ公演を実施。アラビア語と日本語がミックスされたアニメメドレーを披露し、音楽を通じた新たな国際交流の可能性を示しました。

さらに、今年の2月から3月末にかけて、大阪 EXPO のサウジパビリオンに向けた取り組みとして、日本の7都市や各公園・広場で、『Meet Saudi』のカーバン展示やサウジコーヒー、

デーツ、伝統衣装体験など、サウジアラビア文化をより身近に感じられるイベントが開催されています。

参考

<https://www.moc.gov.sa/en/Modules/Pages/Cultural-Years>

<https://www.alriyadh.com/2105390>

https://www.arabnews.jp/article/arts-culture/article_48497/

https://www.arabnews.jp/article/features/article_82208/

<https://saudivisaoffice.com/ja/サウジアラビア、2025年を「手工芸の年」と命名/>

<https://x.com/MOCCulinary/status/1854179478714397083>

<リトアニア語と日本語-驚きの共通点>

氏 名：アウドリュース サブーナス
任 命 年 度：令和元年度任命
出 身 地：リトアニア
在 住 地：東京都小平市在住



一見、リトアニア語と日本語は相違点ばかりが目立って見えます。確かに、文字、話者数、地域（北ヨーロッパと東アジア）という観点から見るとリトアニアと日本の文化は非常に異なっており、その当然の帰結として言語も全く似通わないように思えるかもしれません。この記事では、両国の言語の意外な共通点に焦点を当てながら、私の母語であるリトアニア語を紹介します。

リトアニア語はバルト語派に属するインド・ヨーロッパ語族の一言語です。リトアニア語話者の数は日本語話者の40分の1に過ぎませんが、「インターネットで最も使われている言語」の中では31位を占めています（ちなみに、日本語は4位に位置しています）。リトアニア語はインド・ヨーロッパ語族に含まれますが、言語的に最も近いお隣の国のラトビア語でもお互いに通じないため、孤独感は強めです。一方、消滅に瀕する琉球語派の言語（沖縄語などの琉球諸語）以外、親戚のような言語を持たない日本語はもっと孤独かもしれません。リトアニア語の場合、バルト語派の親戚は殆ど残っていませんが、文法、それから音声学的に保守的な言語なので、インドの古典語であるサンスクリットとの共通点が多く保持されていると言われていています。音声の場合、リトアニア語の方が複雑な音韻があります。リトアニア語は11母音と45子音から、日本語は5母音と16～21子音から成り立っている言語だと言われていています。

それでも、日本語とリトアニア語は全く違う言語ではないか、と考える人が多いでしょう。実に六年以上の歳月を日本で過ごしている私は、両者の間に言語の表層に留まらない、様々な文化的な共通点を見出しました。リトアニアと日本はその距離にして八千キロ以上離れており、幕末以前は全く関わりのない国同士だったようですが、日本人とリトアニア人の価値観を比較してみると類似点が見つかります。例えば、両国の国民の多くは大体恥ずかしがり屋さんで、公衆の面前では感情を表さないのが一般的です。また、両者とも家族との関係を友人との関係よりも重んじ、友達になるまでは時間がかなりかかるとも言われています。その一方で、日本人、あるいはリトアニア人と友達になることが出来たら、その人とは生涯の友人になることができる可能性が少なくありません。

このような様々な民族の価値観は言語に大きな影響を与えられていると考えられています。社会言語学的な視点から見ると、日本語の「友」（友達）とリトアニア語の *draugas*（男性名詞・単数系・主格）は英語の *friend* より親密なニュアンスを持っています。従って、表面的な関係を表したいときは「知り合い」/*pažįstamas*

(ニュアンスは同じ)が使われることが多いです。偶然の賜物か、似ているように見える単語の一覧を紹介します。これまでリトアニア語と日本語の間で、発音と意味が似通った単語を計 26 語見つけました。そのうち 8 語の例を以下に示します。

1. リ : *inkaras* (インカラス)「錨」、日 : 錨 (いかり)、
2. リ : *anga* (アング)「穴」、日 : 穴 (あな) 、
3. リ : *ežia* (エジャ)「畔」、日 : 畔 (あぜ)
4. リ : *kumelys* (クメリース)「駒」、日 : 駒 (こま)
5. リ : *musė* (ムセ)「蠅」、日 : 虫 (むし)
6. リ : *kirsti* (キルスティ)「切る」(原形)、日 : 切る (きる)
7. リ : *toli* (トーリ)「遠い」、日 : 遠い (とおい)
8. リ : *kando* (カーンド)「噛んだ」(過去形)、日 : 噛んだ (かんだ)

両言語を突き合わせて考えると、面白く聞こえる単語もあります。例えば、「略(まいな)い」はリトアニア語で *mainai* (マイナイ)「交換」という意味になります。日本語で「急(せ)かす」という表現がありますが、リトアニア語の *sekasi* (スェーカスィ)は「上手く行く」という意味になります。また、リトアニアに滞在する時は勘違いしやすい単語のうちの一つかもしれませんが、「ネ」は否定語 *ne* (いいえ) という意味になります。

文法は異なる点が多いですが、日本語を学び始めた時に気づいた点としては、場合によっては英語よりもリトアニア語と日本語の文構造が近いことがあります。例えば、以下の例ではリトアニア語と日本語の文構造は同じです。

リトアニア語 : *Mano daugkart matytas filmas*

日本語 : (私の) 何回も見たことがある映画

英語 : *The movie I have seen many times*

最後にお気に入りの共通点の一つを紹介します。 *keistas* (ケイスタス)「変わった」という単語です。二つとも「変わる / *keisti* (ケイスティ)」という動詞の過去形から作られている形容詞で、場合によっては悪くない意味として使われることもあります。

遠くかけ離れた民族であるリトアニア人と日本人の中に相違点があることは当たり前ですが、今回は共通点を取り上げてみました。言語としてのリトアニア語と日本語の発展過程が相当程度に異なって来たのは事実ですが、それでもお互いに全く交わることのない言語だと言い切ることも出来ないでしょう。グローバル化が叫ばれて久しい昨今ですが、言語の多様性は大切にしていきたいものの一つです。次世代にもなるべく驚きに満ちた世界を残しておきたいと思えます。

＜京都と泉州における伝統継承モデルの比較—家元制度と宗族ネットワークを例に—＞

—クを例に—＞

氏 名：楊 雅韻（ヨウ ガイン）

任 命 年 度：令和3年度任命

出 身 地：中国福建省泉州

在 住 地：京都市在住



京都に在住する筆者と、実家がある泉州は、ともに豊かな伝統文化を誇る地域である。これらの地域では、伝統を守り伝えるために、各々独自の継承システムが確立されている。具体的には、京都の家元制度は、技芸や伝統芸能を組織的に継承・発展させる仕組みとして機能し、泉州では宗族ネットワークが家族や一族を通じた伝統の維持を支えている。一見、どちらも伝統継承に寄与している点で共通しているが、その構造や運用方法には明確な違いが存在する。本稿では、これら両地域の具体例をもとに、共通点と相違点を詳しく考察し、それぞれの伝統継承モデルが果たす役割について検証していく。

日本の家元制度は、茶道の裏千家や表千家、華道の池坊、能楽の観世流などの伝統芸能や武道において見られる独特の師弟制度である。家元は流派の技術や精神を継承・管理し、弟子に対して技術や知識を伝授する。弟子たちは家元から学び、それを次世代へと伝えることで伝統が維持される。この制度の特徴は、師弟関係を基盤とした縦のネットワークによって成り立っている点にある。技術や知識の継承が主な目的であり、継承者は必ずしも血縁関係に基づくものではなく、才能や適性が重視される。また、流派の一貫性と権威を保つために、家元が強い影響力を持つ一方で、革新や変化が制限されることがあり、伝統の形式や内容が固定化される場合がある。

一方、中国の泉州を含む南部地域では、「宗族」と呼ばれる父系血縁集団が社会の基本単位となっている。泉州の林氏宗族や陳氏宗族などがその代表例であり、宗族は共通の祖先を持つ男性の子孫から構成され、宗祠（祖先を祀る祠堂）を中心に活動している。宗族のメンバーは、祖先祭祀や婚姻、相互扶助などを通じて強固な結びつきを維持し、伝統や文化を継承している。このネットワークは血縁関係を基盤とした横のつながりによって成り立っており、家系や家名の維持が重視されることで、家族全体で伝統や文化を共有することができる。さらに、地域社会における支援や秩序の維持、経済的な協力など、多岐にわたる役割を果たしている。しかし、血縁関係が重視されるため、外部からの新しい要素や革新が受け入れられにくい場合があり、伝統の継承が閉鎖的になる可能性もある。

京都の家元制度と泉州の宗族ネットワークは、構造、継承の方法、社会的役割という点で大きく異なる。家元制度は、師弟関係を中心とした縦のネットワ

ークを持ち、才能や適性を重視して継承者を選び、特定の技術や芸道の保存・発展に貢献している。これに対して、宗族ネットワークは血縁関係を中心とした横のネットワークを持ち、血縁に基づく継承を行い、地域社会における秩序維持や相互扶助、経済的協力を担っている。また、家元制度は家元の権威によって革新が制限されることがあるのに対し、宗族ネットワークは血縁重視のため外部の新しい要素が入りにくい。

家元制度と宗族ネットワークの比較

比較項目	家元制度（京都）	宗族ネットワーク（泉州）
構造	師弟関係を中心とした縦のネットワーク	血縁関係を中心とした横のネットワーク
継承の方法	才能や適性を重視し、必ずしも血縁関係に依存しない	血縁関係に基づき、家系の維持が最優先
社会的役割	技術や芸道の保存・発展に貢献	地域社会の秩序維持、経済的協力、相互扶助
革新性	家元の権威によって革新が制限される場合がある	血縁重視のため、外部の新しい要素が入りにくい

京都の家元制度と泉州の宗族ネットワークは、それぞれの文化や社会構造に根ざした伝統継承モデルである。家元制度は師弟関係を通じて技術や知識を継承し、宗族ネットワークは血縁関係を通じて社会的な結びつきや伝統を維持している。また、家元制度では才能や適性が重要視され、血縁に依存しない一方で、宗族ネットワークでは血縁が強く重視されるという根本的な違いがある。しかし、どちらの制度も、伝統の維持と継承のために強固な組織構造を持っている点では共通している。このような違いや共通点を理解することで、日本と中国の文化や社会の特性をより深く知ることができるだろう。

参考文献

- 大屋幸恵「家元制度における構造的特性と「技芸の伝授」」『年報社会学論集』1993 巻6号、1993年、155-166頁
- 瀬川昌久「中国南部における宗族発達のサイクルと地域性」『東北アジア研究』1999年、45-64頁
- 瀬川昌久・川口幸大編『＜宗族＞と中国社会——その変貌と人類学的研究の現在』風響社、2016年
- 首藤明和・王向華編『日本と中国の家族制度研究』風響社、2019年

<古文書学習の感想>

氏 名：李帆（リ ハン）
任 命 年 度：令和3年度任命
出 身 地：中国山西省
在 住 地：大阪市在住



私の専門は東ユーラシアの歴史を扱う東洋史です。歴史学とは、過去の人々が残した文字記録（史料）を分析し、その時代の実態を明らかにする学問と理解しています。これは日本史と東洋史に共通するだろうと思いますが、史料の性質や利用方法には大きな違いがあります。せっかく日本へ留学しに来ましたので、学部課程でも修士課程でも日本史領域の史料演習授業を連続で履修しています。

私が学んだ古文書としては、江戸藩主であった各大名家に届いた手紙を中心に構成された大名文書、寺社で保存されていた寺社文書、庶民関係の譲り状や京町家所蔵の奉公人請状などの証書類文書があります。大名文書には、各大名家の政治的・社会的活動やその家臣との関係が反映されており、当時の具体的な出来事や状況を分析する上で重要な情報を提供します。ただし、大名文書や寺社文書には、その家系や寺社から発信された文書は含まれておらず、受信記録のみで構成されているため、情報が一方向に偏っているという特徴があると思います。この点を踏まえた上で、断片的な情報をいかに補完し、全体像を描き出すかが史料学習の目的となります。

私の課題である唐代史研究では、正史や政書、文集といった編集史料が主に用いられます。これらの史料は体系的に整理されており、時代の流れや制度的な側面を把握するのに適しています。対して、情報が公式的であるがゆえに、地域や個人の細かな動きは掴みにくいという限界があり、墓誌・石刻など出土史料などでこまめな補足研究が流行ってきました。一方で、日本の古文書は、特定の人物や出来事についての具体的な情報を多く含んでおり、このような一次史料を日本史研究で大量に存在、多く使えることが実に幸せなことだと思います。ただし、情報が断片的であり、背景や文脈の解釈が領域外の私にとって難しく、また、これらの手紙は当時の書き手の意図や視点が強く反映されているため、裏付けのための追加調査が必要不可欠です。

古文書を学んだ理由は、くずし字の翻刻や候文・古典文法に興味があり、より高度な解読能力を身につけたいと思ったからです。いろんな入門書・崩し字読解書を読み、翻刻を練習していたのは、公式様文書や朱印状・定めなどでした。それらの文書は定型的な形式や言葉遣いを使っており、比較的読みやすいものでした。対して今触れている大名文書は個別性が強く、非公式な内容であるため、話題の特定や文意の把握が格段に難しいと感じました。

特に困難だった点として、まず、初見のくずし字や「御」「候」などの崩し形

のバリエーションが頻出するため、高度な翻刻スキルが求められていること。また、内容の理解には、当時の社会的背景や用語の知識が必要であり、これに加えて日本史研究特有の専門意識が不足していることも課題となりました。さらに、人名の特定が難しく、授受関係が不明な場合があり、別領域の人なので関連史料の調べ方が分からない点などがありました。

しかし、古文書の学習を通じて得られた収穫も多かったです。大名文書を読むことで、その藩主の政治活動や生活に関する具体的な情報、たとえば幕府との交流、普請や冠婚葬祭に関わる記録など、さらには鹿の脳脂の購入というこまめなことに至るまで、多様な話題に触れることができました。また、特有の用語や表現を学び、古文書翻刻の技術を大きく向上させることができました。

これからは個人の専門研究が次第に忙しくなり、古文書の授業を履修することは難しいかもしれません。しかし、これまでに得た知識や技術を活かし、今後も古文書の学習を続け、博物館や資料館で古文書を見れば翻刻を試みていきたいと思えます。この授業を通じて学んだことは、今後の研究や史学への取り組みにおいて、大きな経験となるでしょう。

なお、簡単な例として、京都の町頭南町にある、財産を息子に譲渡して譲渡内容を記した江戸時代の譲り状の一つを翻刻（活字化）してみましよう。

譲り状之事

一、当町我等所持之家屋鋪壺ヶ所、我等
相果候ハヽ、妻さい并忒熊治郎右兩人江
相譲り申處実正也、死後親類縁者
其外他所を違乱妨申者、毛頭無御座候、
為後日譲り状仍如件

譲り主

寛政五年丑十一月廿四日 帯屋弥兵衛（印）

新町通三条上ル町頭南町
年寄長右衛門殿
并町中



町頭南町文書
(京都府立京都学・歴彩館所蔵)

<千年前の中国『東京』を歩く：開封・清明上河園の旅>

氏 名：張 玥（チョウ ゲツ）
任 命 年 度：令和4年度任命
出 身 地：中国河南省
在 住 地：東京都在住



今年、私は中国河南省の開封市を訪れ、まるで千年前の世界にタイムスリップしたかのような体験をしてきました。開封は、かつて「東京」とも呼ばれた歴史ある都市で、その魅力を存分に味わうことができました。

開封：かつての「東京」

開封は、北宋時代（960年～1127年）に首都として栄え、「東京汴梁」とも呼ばれていました。当時の開封は、商業や手工業が発展し、世界中から商人や旅人が集まる国際的な都市でした。

清明上河園：北宋の繁栄を再現

開封市にある清明上河園は、北宋の画家・張拙端の名作『清明上河図』を1:1の比率で再現したテーマパークです。園内は約600ムー（約40万平方メートル）の広さを持ち、その中で水域は約180ムー（約12万平方メートル）を占めています。大小合わせて100隻以上の古代船舶が配置され、400棟以上の建物が立ち並び、景観建築面積は3万平方メートル以上に及びます。

園内での体験

園内を歩くと、宋代の建築様式で再現された街並みが広がり、まるで千年前にタイムスリップしたかのような感覚を味わいました。伝統的な演劇や音楽のパフォーマンスが随所で行われ、宋代の人々の生活や芸術に対する理解を深めることができました。



(本人撮影)

大型実景ショー『岳飛・鄜城大捷』

特に印象的だったのは、大型の没入型夜間実景ショー『岳飛・鄜城大捷』です。このショーは、南宋時代の名将である岳飛と彼の率いる岳家軍が、金軍との戦いで大勝利を収めた鄜城の戦いを題材にしています。最新のマルチメディア技術とリアルなセットを駆使し、観客はまるで戦場にいるかのような臨場感を味わうことができます。特に、馬術やアクションシーンは迫力満点で、観客を魅了します。



(本人撮影)

まとめ

清明上河園は、歴史と文化を愛する人々にとって必見の場所です。北宋時代の繁栄と人々の生活を直接体験できるこの場所は、中国の豊かな文化遺産を理解する上で非常に貴重な存在です。また、日本の平安時代と同時期の中国の文化や生活を知ることによって、日中両国の歴史的なつながりを感じることができるでしょう。ぜひ一度、清明上河園を訪れて、千年前の中国の「東京」を体感してみてください。

<日本留学の契機：京都>

氏 名：尹粹娟（ユンスヨン）
任 命 年 度：令和4年度任命
出 身 地：韓国
在 住 地：京都市在住



私は韓国出身です。京都大学大学院人間環境学研究科に在籍し、近代日本思想史・近代日韓アジア主義について研究しています。京都での生活は今年で6年目に入り、京都府名誉友好大使に任命されてからはもう3年が経ちました。この三つの文章をよくよく読んでみると、京都との縁は国籍や所属などを超えて学問の重要な契機となっていたと考えられます。

2015年から私は日韓フリーハグという活動をしています。韓国の伝統衣装チマチョゴリの姿で日韓友好を願うスローガンを掲げて、北海道から沖縄まであらゆる地域でフリーハグをしました。その出発点となったのが京都です。

2015年の8月、四条辺りでチマチョゴリを着て両手を広げてハグを待っていました。どこか懐かしい笑顔でハグしてくれる方、チマチョゴリの姿を遠い所でじっと眺める方もいれば、私の手を握ったまま涙を流しながら「ありがとう」と言ってくれた方もいました。特に、私はその方の涙から京都で生まれ育った在日コリアンの「哀歓」を感じました。韓国出身である私はその「哀歓」という感情に含まれた日韓関係に心が惹かれ、近代日韓において最も重要なアジア主義というテーマを研究することを決めました。

京都大学では韓国哲学を専門とする小倉紀蔵先生の研究室で研究する機会をいただきました。また京都大学の朝鮮語科目のTAを担当し、学生たちの朝鮮半島についての率直な考えを聞くことができました。朝鮮半島との縁の深い京都で学生たちと朝鮮語を通じた交流はもちろん、韓国のモダニズム文学を体表する李箱（イサン）の作品に真剣に向き合う学生たちの表情は心を揺さぶるものでした。

「小さい日韓関係」はこのように多様であることを私は京都で実感しています。京都でのフリーハグ経験が留学の契機となり、また京都大学での研究と学生たちとの交流は日韓関係への理解をより豊かにしてくれるものでした。またこれらの出発点となったのが京都で感じた「哀歓」であり、今後も京都での「小さい日韓関係」を発見し、それを原動力として研究を進めていきたいと思っています。

<文化の伝承>

氏 名：李 沫（リ マツ）
任 命 年 度：令和4年度任命
出 身 地：中国河北省
在 住 地：京都市在住



私は中国出身で、現在日本に留学しています。留学でも旅行でも出張でも、外国にいる時によく関心を持つのは、文化の違いでしょう。では、文化の違いとは何でしょう。私が感じたことの一つを紹介いたします。

私は中国の古典小説『紅樓夢(こうろうむ)』が好きです。『紅樓夢』は、清代(17～20世紀)に書かれた長編小説で、上流貴族である賈氏一族の生活を中心に描かれています。その中に、次のような描写があります。

二人你言我語、一面行走一面説笑、不覺到了柳葉渚、順著柳堤走來。因見柳葉纔吐淺碧、絲若垂金。鶯兒便笑道。「你會拿這柳條子編東西不會？」蕊官笑道「編什麼東西？」鶯兒道「什麼編不得。頑的、使的、都可……」(俞平伯校訂『紅樓夢八十回校本』第2冊(中華書局1974年)第59回による)

二人はおしゃべりをして、歩きながらはしゃいでいるうちに、いつの間にか柳葉渚(りゅうようしょ)までやってきたので、柳の土手に沿って歩きます。見れば柳の葉はやっと浅碧(うすみどり)に色づいたばかりで、糸のような枝は黄金を垂らしたようです。鶯兒はそこで笑いながら言いました。「あんた、柳の枝で何か編める?」「何を編むんですか?」「編めないものなんてないわ。遊ぶもの、使うもの、何でもできるんだから……」(井波陵一訳『新訳紅樓夢』第4冊(岩波書店2013年)による)

私はこの描写が好きです。仲間二人が笑いながら、柳の並ぶ道を歩く情景がすぐに頭に浮かべます。私の実家にも柳が多くあり、道路の両側だけでなく、ところどころにも見かけることができます。何かを編むことはできませんでしたが、柳の枝を手にとって遊んだり、皮を枝からきれいにはがし、先端の緑色の部分を取り除いて簡単な笛を作って吹いてみたことがありました。また、このような情景は、これまで読んだ詩や散文、あるいは観たドラマの中にもあったように思います。自分の過去の生活で感じたものが、この描写を読むことで再びよみがえったと感じます。

また、京都に留学している現在、和歌に関する講義で先生が一首の和歌を紹介したことがありました。その和歌は京都を舞台に詠まれたもので、ある季節の特定の時間になると、清らかな風が吹くという内容だったと記憶しております。先生が実際にその季節のその時間に試してみたところ、和歌に詠まれた情景が今でも感じられることに感動したと話していたのを、私は覚えています。

私も、その季節のその時間になったら、実際に感じてみたいと思っていましたが、その和歌の内容をはっきり覚えていなかったため、試すことができませんでした。しかし、京都で何年も生活してきたので、知らないうちにそれを感じたことがあったかもしれません。また、これまで京都で見た風景や文化に関する日常の記憶が心に残っているので、いつかそれに関係するものを読んだとき、この記憶もよみがえるのでしょうか。

このように、文化は、それぞれの地域の自然環境や、その環境が人々に与えてきた影響によって生まれ、代々受け継がれながら、後の世代の人々にも影響を与え、それぞれの文化が形作られてきたのでしょうか。

それぞれの土地で育まれた文化や伝統を大切にし、その美しさを感じることができれば、とても幸せなことだと思います。

＜追憶・井手町＞

氏 名：王艶蓉（オウ エンヨウ）

任 命 年 度：令和5年度任命

出 身 地：中国遼寧省大連市

在 住 地：京都市在住



思えば、井手町の研修からもう3ヶ月も経った。

京都府民でも、井手町のことを知らない方は沢山いるだろう。私も京都に来てから、大使になれなかったら井手町と出会うことはなかったかもしれない。

堅苦しい文化や歴史の紹介より、井手町の「人」の温もりを伝えたらと思っている。

曲がりくねった山道を進むと、目の前に広がるのは、時には紅葉、時にはせせらぐ溪流。この山道の終点、つまり私たちの目的地がどのような場所なのか、まったく想像がつかなかった。そこで、山頂で太陽の光が髪に降り注ぎ、井手町の皆さんが笑顔で木の小屋の前に立っているのを見たとき、その答えがわかった。

私たちが真先に出会った井手町の美しさは、大正池にあった。朝のやわらかな日光と秋の紅葉が大正池の水面に映り込み、互いに美しく溶け合っていた。

「ここが大正池です。」と担当の方が紹介してくれた。

山頂の木の小屋のそばで、都会の喧騒を逃れ、山の静けさを楽しむ客が、大正池に向かいながら朝の最初の一杯のコーヒーを淹れていた。「もし毎日こんな朝を過ごせたら、どんなに幸せだろう」と心の中で思いながら、大正池を一周回る散策を始めた。

そこで、初めてイノシシが来た痕跡を知り、久しぶりにこんなにも自然を身近に感じた。担当の方は私たちと笑いながら話し、さまざまな質問に答えてくれた。かつて彼は人々を守る消防士だったが、今は井手町に移り住み、この地の一本一本の草木を守っている。

私たちは一緒に竹炭を使って自分だけの扇子を作り、一緒に書道を学び、一緒に昼食を囲んだ。まるで井手町の皆さんと長年の知り合いであるかのように、まるで私たちも井手町の一員であるかのように感じた。いや、それどころか、むしろ「もっと早く出会えていればよかった」とさえ思った。

最後にたくみの里で過ごした時間は、私にとって最も忘れがたいものだった。

それぞれの手作り体験を終えた後、いつの間にか皆がバンドの周りに集まり、輪になっていた。日本と中国の共通の歌を次々と一緒に歌いながら、心がひとつになっていくのを感じた。

たくみの里では、電波は届かず、残るのは人と人との交流だけ。私たちは国籍を超

え、友情で、愛でつながっていた。

いつの間にか、別れの時がやってきた。帰りのバスに乗った瞬間、窓を開け、井手町の皆さんに手を振って別れを告げる。すると、道路の向こう側から聞こえてきたのは、集まった皆さんの歌声—「また会える日まで」の大合唱だった。

その瞬間、こみ上げる別れの寂しさを抑えきれず、涙がこぼれた。

井手町の皆さん、また、会える日まで。

<西田幾多郎の故郷をたどる>

氏 名：孫鑫(ソン シン)
任命年度：令和5年度任命
出身地：中国山東省青島市
在住 地：東京都在住



4月は新入社員研修で一ヶ月ほど石川県で過ごしていたが、ある休日、快晴が理由なのか桜を観たかったのか、いきなり旅に出る気分になった。それは割と大きな決断である。なぜなら、石川県は土地が広いのに加え、電車の行き先と本数も限定的になっているため、運転から遠ざかっていた私にとっては、相当歩く覚悟が必要だったからである。

明日の足を心配しつつ、それとなくグーグルマップでズームアウトしてみたら、一瞬、ある懐かしい名前がちらっと見えた。4年間哲学を専攻とした私は、条件反射かのようにそこをタップしたら、目に映ったのは「西田幾多郎記念哲学館」だった。「そういえば確かに石川県出身だったような話があったな…」と必死に大学時代の記憶を甦らせながら、出支度を済ませ1時間に1本の電車に乗り出した。

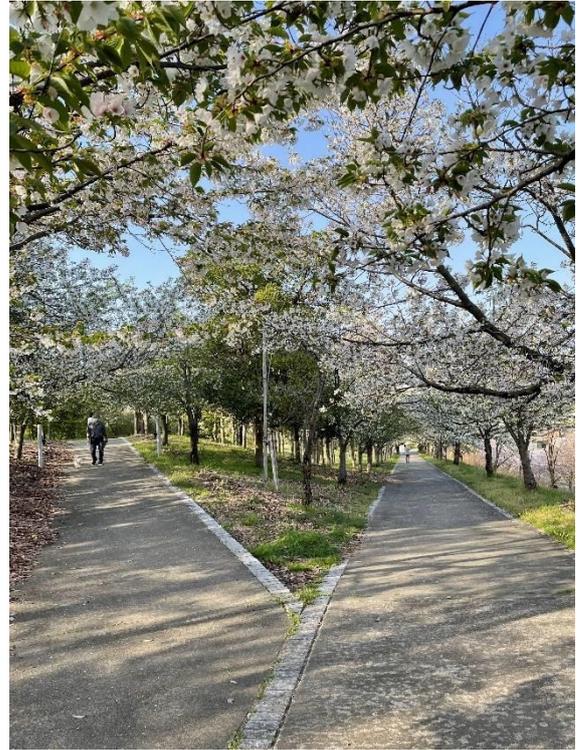
西田幾多郎といえば、西洋の論理的な哲学的世界観と、東洋の論理性が弱い道徳の実践的要求を融合しようとした京都学派や、銀閣寺前の「哲学の道」が思い出されるだろう（哲学に興味がある人に限った話かもしれないが…）。電車で、後ろへと過ぎてゆく石川ならではの田園風景を眺めながら、京都から離れた後、初めて京都と絡みのある所を訪ねることを思うと、鼓動が高まり期待が湧き上がってきていた。

たどり着いたのは石川県かほく市、「宇野気駅」というところだった。最寄り駅と言いつつも、目的地まではまた15分ほどの道程がある。ただ、オーバートーリズムの心配は全くないなと思ったりにして、人目を意識せずに歩いたり停まったり、道中の桜の写真を撮りながら西田幾多郎記念哲学館に到着したのである。

館内は、西田の原稿や遺品、そして9年前に解体された京都・田中上柳町にある西田幾多郎旧宅の床の間が展示されている。また、最上階に展望ラウンジがあり、閉館時間にもなれば日本海に沈む夕日も楽しめるそうだ。

私は日が暮れる前に帰路についたが、今後もこのような気付きを作っていきたい。





館の様子
館の敷地内にある「思索の道」(哲学の道の姉妹道なのかな?)

館内からの眺望



JR 宇野気駅前に佇んでいる西田幾多郎像

<異文化を尊重できる元とは何か>

氏 名：彭唯一（ホウユイイツ）
任 命 年 度：令和5年度任命
出 身 地：中国山西省
在 住 地：京都市在住



2024年12月1日に京都府名誉友好大使の第2次「研修活動」により、京都府の「井手町」に行ってきた。「井手町」は京都市から電車で30分の南の所があり、春は玉川に沿ってきれいな桜があり、他の季節にも里山にある「大正池」などの色々な自然景色を楽しめる所である。

今回は秋の「大正池」と里山にある「匠の里」を体験させていただいた。「鍛冶」や「陶芸」などの普段あまり体験できないものを体験できてとても楽しかったが、一番印象に残ったことは「人間の暖かさ」であった。

なぜかという、スケジュールに書かれたことを全て体験できて、もう帰る時間だと思っていたが、匠の里の皆様にご誘われて「餅うち」も体験して、自分たちで打ってきた餅を用意してくださったあんこに入れて、オリジナルな「おしるこ」もできた。また、「匠の里」の方々に組んだバンドとも合唱した。年齢差のあるみなさんとは普段聞いているリストが全く違うが、合唱できる歌を一生懸命思い出している素直な顔にとっても感動していた。最後に、バンドのみなさんと私たちの体験項目を担当していた師匠たちが歌いながら私たちのバスが見えなくなるまで見送りしてくださった。

今回の経験が最も感動的だったのは、国籍が違った皆さんが自分の普段の自分ではなく人間としての最も素直な接し方を感じられたためだと考える。

これだけではなく、他の活動で井手町の他の皆さんと中国の旧暦のお正月を話しながら「水餃子」を一緒に作った活動もあった。講演の前に自分のパソコンの不具合でパワーポイントを開けなかったため、4台のパソコンを持って来てくださった担当の方と、できた水餃子を沸かした鍋に入れるのを怖がっている私に「入れてあげようか」とおっしゃった主婦の方からも感じられた。

「研修活動」は、普段の活動と違い、大使である私たちから発信するのではなく、京都から異文化を持っている私たちに発信する活動であったため、今までと違う立場で考えることができた。大使であっても、京都府民であっても、私たちは「まずは人間である」ということが変わらない。そして、国籍にかかわらず、最も素直な接し方で相手と接することが一番自分の気持ちを表せることである。この素直な気持ちを持っていた上に、それぞれの国の文化を相手に認めさせるのではなく、シェアを通じて文化を交流させることを意識できれば、本物の異文化を理解し、尊重できるのではないかと考えた。

<京都の神社研修を経て>

氏 名：マイ イン トウ
任 命 年 度：令和5年度任命
出 身 地：ベトナム
在 住 地：京都市在住



大学の Community Engagement Program スピリチュアルツーリズムという授業にて筆者が「今宮神社」「上御霊神社」「清明神社」という3つの神社で研修することになった。それぞれの宮司氏の話を知ることができ、どの話も非常に興味を持った。そのうち、特に興味を持った2つを紹介する。

1つ目に、今宮神社の宮司さんの話である。当社地には平安建都以前より疫神を祀る社があったといわれ、京都でも歴史のある神社である。そのため、今宮神社には文化財として指定されているモノ・コトも多い。文化財の保護は国民の文化的向上に資し、世界文化の進歩に貢献することを意味する一方で、変化することがないという意味でもある。そのうち、今宮祭の事例が挙げられる。

今宮祭は今宮神社が行う祭りである。一条天皇御代の正暦五年（994）に都で疫病が猖獗を極め、京都洛中では、祀り疫災を鎮めるため「御霊会」が営まれ、「紫野御霊会」もそれらの一つである。

長保三年（1001）に、疫病がまた流行り、京の人々を悩ませたため、再び「紫野御霊会」が営まれた。そこで、新たに神殿三字・瑞垣および神輿が造営され、今宮社と号された。この「紫野御例会」は「今宮祭」の由来である。今宮祭はかつて正暦五年（994年）5月27日に営まれたが、近代毎年5月5日に行われるという。

祭礼というのは「人」と「神様」をつなぐようなものである。人は神様を信じるだけでなく、祭礼を通じて地域の人々が協力して行動するからこそ「ご利益」の概念が生まれる。具体的な事例を挙げると、例えば地震があった時に家族や周りの人に被害が出なかった場合、普段から神様に祈り、祭礼を行えばその幸いな事が「ご利益」とされるであろう。一方で、もし最初から何も信じなければその幸いな事が単に「偶然」なこととされてしまう。このように、地域の人々にとっては祭礼は神様との繋がりだけでなく、共同作業を通じて地域のコミュニティを育むものであり、非常に重要な存在である。祭礼には地域の人々の想いや願いが込められており、祭礼の行事にて表現されるものとも言えよう。そのため、時代とともに世代が変われば人々の想いも多少変わるため、祭礼に込めたい想いも変わっていく。しかし、今宮祭をはじめ、今宮神社の祭礼が文化財に指定されているため、変化することが許されない。そうすれば次第にこれからの人々の想いを込める場所が無くなってしまふ。結果的に守ってきた伝

続な祭礼には若者及び次代の想いが存在せず、単に「形」のみになるであろう。伝統とはただ守るだけではなく、時代に合わせて変化を取り入れながら未来につなげていくものであると考えられる。また、宮司さんも今後の観光は単に「形」及び「表面」のような見るものではなく、中身すなわち地域の想いのある観光を目指してほしいと述べていた。

2つ目に、上御霊神社の宮司さんの話の中に出てきた「こころしずめ」のことである。上御霊神社とは、平安時代に無実の罪で亡くなった崇道天皇の心を鎮めるために祀った神社であり、現在では7柱が合祀され、悪疫退散の御霊信仰の発祥の地とも伝わる神社である。

宮司さんの話の中では、日本の神道にある八百万の神に触れた。神道では、神様がさまざまなところに存在している。その中に、挙げられる御神体は「自分」である。神様は空の上にいる存在ではなく、我々の側また中に存在しており、非常に近い存在である。そのため、人にも神が宿っているため、神社での祈り事は鏡に映る自分の神様への祈りでもある。「鏡(かがみ)」の「我(が)」を取ると、残るのが「神(かみ)」になる。人間関係や社会的な問題が重要なこの世の中には、心に悩みのある人も多くいる。そこで、上御霊神社では、不安やストレス、緊張、苛立ちなどをしずめるご利益があるとされ、「こころしずめ」の御守りもある。その御守りの中には、小さな鏡が入れられている。すなわち、こころしずめのためには、自分と向き合うことが大事である。

今回の神社研修を通じて、日本人のこころと言える「神道」についてより詳しく理解できた。特に筆者が今まで伝統というのは守るべきものであると考えていたため、今回の今宮神社の宮司さんの話にある「守るだけでなく変化も必要」という点が非常に興味深かった。確かに古き良きものを後世に引き継ぐためには単に守るのでは後世に共通点がなく、若者が自分の想いを込めるところがないであろう。その点について、今後どのように伝統を後世に残すかというのは非常に重要な課題であると考えられる。

<人生の柱>

氏 名：毛 嘉琪（モウ カキ）
任 命 年 度：令和5年度任命
出 身 地：中国江西省
在 住 地：京都市在住



博士号を取るのが私の目標です。そのためにずっと頑張ってきましたが、人生のすべてではありません。建築にたとえると、博士号は最大の柱ですが、ほかにもたくさん柱があります。ニーチェに“*He who has a why to live can bear almost any how*”という名言があります。幸運なことに、私はその why を複数も持っています。

研究以外にも、メンタルヘルスの知識を勉強しており、健康な体を維持するために、アーチェリーの練習もしています。できるだけ多くの柱を立てることで、より強い自分を作ることができます。家族や愛猫、友人の支えはもちろん大切ですが、へこむ時に、対立側の悪意や否定も、どん底から抜け出すための格好の燃料となりました。私を支えてきたたくさんの柱の中で、研究以外の重要な一柱を紹介していきたいと思います。

インドア派の学者であるため、首や肩が痛むのが日常茶飯事でした。しかし、京女の洋弓部に入り、アーチェリーを始めてから、痛みや不調などがすべて治りました。身体も丈夫になり、部活で仲間とも楽しい時間を過ごせました。そして、去年の12月、学生生活の中で最後となる試合に参加しました。近畿大学で、尊敬する古川高晴選手にもお会いできて、「頑張ってください」と励まされました。残念ながら、僅か3点差で決勝と無縁になりました。

その後、無事博士論文を提出しましたが、決勝戦に参加できなかった遺憾が積み上げてきました。ちょうどそのタイミングで、コーチが岡山に出張することになりました。憧れの中西絢哉選手にぜひ会いたいのので、岡山に同行させて頂くことになりました。その時に開催される「倉敷市インドアオープンアーチェリー大会」にも参加を申し込みました。こうして、学生時代の最後の試合をやり直す機会がやってきました。

試合前日に倉敷に到着し、会場で練習していましたが、疲労と緊張のせいで、普段より点数が低かったです。何気に初めての岡山ですが、主催者や練習しているアーチャー達も優しく接してくれて、すぐここを好きになりました。試合当日に中西選手にお会いできて、とても嬉しかったです。立ち順も近いので、すぐそばでプロの射形を観られて、感無量でした。ハイパフォーマーの近くで作業をすると、自分の効率も15%アップという研究報告を見たことがありましたが、今回は自分で実証済です。中西選手のおかげで、前の試合より高い点数を出せて、最後はBブロック3位に入賞しました。

アーチェリーを通じて、素敵な方々を知り、心身ともに強くなれました。そして暫く研究を離れる時間もできて、いろいろと見直すきっかけにもなりました。京女の洋弓部、稲本コーチ、近畿大の古川さん、岡山の駒場さん、藤田さん、中西選手、

そして岡山アーチャーの方々、本当にありがとうございました。まだまだ半人前ですが、これからも生涯スポーツとして、アーチェリーを続けていきます。

去年の自分が疲弊しきって、博士号を取る前に死ぬのではないかと思いました。その時、万が一博士号が取れなくても、私はちゃんと意味がある人生を過ごしてきたという考えが増して、平常心を保てました。幸い、私は自分自身が思っていたより強いです。自分の努力だけではなく、たくさんの支えがあったからこそ、自分の夢を叶えることができました。これからも自分の柱をしっかり立てて、維持していきたいと思えます。

なんとか生き延びた今の私が、過去や未来の自分へのメッセージとして、このレポートをまとめています。夢や目標に向けて、頑張っって自分の人生の柱を立てるのがすごくラッキーなことです。もし最悪の場合になり、その柱が崩れても、ほかにサポートする柱があるので、きっと大丈夫です。もしこのレポートが博士号を目指したい人、或いは難関を乗り越えようとする人たちの一助になれば嬉しいです。



1. 京都女子大学洋弓部と古川選手



2. 中西選手と筆者（稲本コーチ撮影）

<果物の王様：ドリアン>

氏 名：LOW JING CHONG（ロー ジン チョン）
任 命 年 度：令和5年度任命
出 身 地：マレーシア
在 住 地：京都市在住



私の国では、国民たちに愛される果物があります。それはドリアンです。ドリアンは「果物の王様」として知られる熱帯果物で、独特な香りとクリーミーな食感が特徴です。ドリアンはマレーシアの人たちの大好物ですが、初めて目にする外国人の方は見た目のインパクトと強烈な匂いに圧倒され、拒否反応を示される方は少なくないかと思います。ドリアンが持つ独特な匂いを「ガソリン」、「腐った食べ物」のような臭いと感じる方も多いかと思います。マレーシアには多くのドリアン品種がありますが、特に人気の高いものは「ムサンキング」、「紅蝦（レッドプローン）」、「D24」、「黒刺（ブラックゾーン）」、「青皮（グリーンスキン）」などがあります。もちろん、品種ごとに果肉の色が異なるだけではなく、味も変わってきます。中でも私が一番好きな「紅蝦（レッドプローン）」は濃厚な甘みで、クリーミーな食感をしています。他にも「青皮（グリーンスキン）」のように日本酒のアルコールの風味をしている品種もあります。マレーシアのドリアンの旬のピークが6月から8月ですが、皆さんはもしマレーシアに行く機会があれば、ぜひドリアンを食べてみてください。



Fig. 1 ドリアンとその果肉。(HATCHLINK jr. HP より)



Fig. 2 ドリアンが完熟になったらドリアンの木から落ちてきます。そのため、多くのドリアン農園では、ドリアンの木の周りに網が設置されています。(撮影日：2024年6月17日)

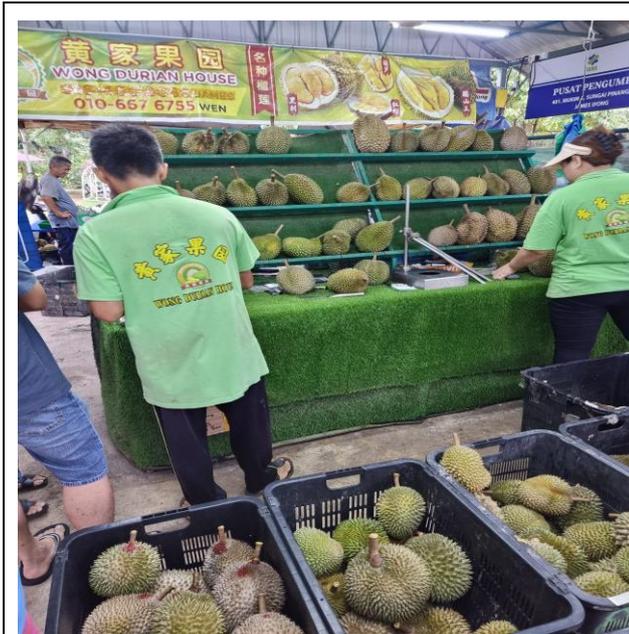


Fig. 3 朝に収穫された完熟のドリアンは農園で集められて販売が行われます。美味しいかつ新鮮なドリアンを求めるマレーシア人はよく農園のところに食べに行きます。(撮影日：2024年6月17日)



Fig. 4 ほとんどのドリアン農園の立地は都心に離れたところにあります。私が実際に2024年6月に行ったペナン島バリック・プラウ区にある「黄家果園」には、ニワトリもいます。(撮影日：2024年6月17日)

猫山王 Musang King	58
葫芦卡利敲 Halo, Capri, Green Skin	45
坤包, 小红 Kunpoh, Xiaotong	38
D600, 虫天虫公 Lipan	38
D604, D11, D168 D2	75
名小 Kahwin Kecil	20
土种 Kampung	15
黑刺 Black Thorn	78

Fig. 5 ドリアンの品種と1kgごとの値段。中では、黒刺がダントツ的に高い。(撮影日：2024年6月17日)



Fig. 6 私が実際に頼んだ4つ異なる品種のドリアン。(撮影日：2024年6月17日)



Fig. 7 マレーシアでは、いたるところで「ドリアン禁止」の看板が見られます。(Penang Hill X より)



Fig. 8 私はドリアンの匂いに大怪我をして、3ヶ月の松葉杖生活を送りました。やることに限られた中でも、ドリアン狩りは行いました。マレーシアの人はそれくらいドリアンが好きです。(撮影日：2024年6月17日)

参考文献：

- [1] Unique Fruits from Around the World in English!, HATCHLINK jr., <https://www.hatchlinkjr.com/blog/%E4%B8%96%E7%95%8C%E3%81%AE%E7%8F%8D%E3%81%97%E3%81%84%E3%83%95%E3%83%AB%E3%83%BC%E3%83%84%E3%82%92%E8%8B%B1%E8%AA%9E%E3%81%A7%E5%AD%A6%E3%81%BC%E3%81%86%EF%BC%81learning-about-unique-fruits-from-arou/> (観覧日：2025年2月20日).
- [2] Penang Hill, X, <https://x.com/mypenanghill/status/1803596363017650650> (観覧日：2025年2月20日).

<京都と上海：異文化の交差点としての観光と交流>

氏 名：袁啓慧（えんけいけい）
任 命 年 度：令和6年度任命
出 身 地：中国・上海
在 住 地：京都市在住



・はじめに

京都は、日本の伝統文化と歴史を象徴する都市として、世界中の観光客を魅了している。特に中国・上海の人々にとっては、文化的な共通点や歴史的背景を持つ京都は、日本の美意識を体感できる特別な場所である。京都府名誉大使として、また留学生として、上海の人々が京都に抱く印象や訪問時の体験を踏まえ、より深い文化交流の可能性について考察する。

・上海と京都の歴史的・文化的背景

上海と京都は、それぞれの国において長い歴史を持つ都市でありながら、その発展の仕方や文化の形成において大きな違いがある。上海は19世紀以降、国際貿易とともに急速に近代化し、西洋文化の影響を受けながらも独自の文化を築いてきた。一方、京都は千年以上にわたり日本の首都として機能し、伝統文化や職人技、神社仏閣の保護を重視することで、独自の歴史を紡いできた。

このような違いがある一方で、両都市はともに芸術や文化を重視し、都市の発展とともに伝統を守り続ける点で共通している。例えば、上海の古典庭園である豫園と、京都の龍安寺の枯山水庭園は、それぞれ異なる文化的背景を持ちながらも、自然と調和した空間の美を追求するという共通した美意識を持っている。こうした相似点が、上海の人々にとって京都をより魅力的に感じさせる要因となっている。

・京都の魅力と上海の人々の関心

京都は、寺社仏閣や伝統建築、茶道、和食といった文化的要素が豊富にあり、上海の人々の関心を強く引きつけている。特に近年、上海では日本文化への関心が高まっており、京都の観光地には多くの上海からの旅行者が訪れている。観光だけでなく、京都の伝統文化を深く学びたいというニーズも増えており、茶道や和菓子作りの体験、着物の着付けといった文化体験プログラムが人気を集めている。

また、京都の町家や町並みに魅力を感じる上海の訪問者も多い。上海の旧租界地区の建築物は西洋風でありながらも、中国の伝統的な要素を融合させた独

自の美を持つが、京都の町家は木造の日本建築を今に残し、どこか懐かしさを感じさせる。こうした京都の建築文化に触れることで、上海の人々は自国の伝統と比較しながら、日本の文化の奥深さを理解する機会を得る。

さらに、京都の食文化も上海の人々にとって大きな魅力となっている。特に、京料理の繊細な味付けや、出汁を活かした調理法は、上海の中華料理とは異なる食文化を感じさせる。加えて、京都の和菓子文化は、見た目の美しさや四季の移ろいを反映した芸術的な要素を持ち、味覚だけでなく視覚的な楽しみも提供する。上海では抹茶ブームが続いており、京都の本格的な抹茶体験ができる店には多くの中国人観光客が訪れている。

・文化交流の発展と新たな可能性

京都と上海の文化交流は、すでに多くの分野で活発に行われている。例えば、京都の伝統工芸である西陣織や友禅染と、上海のシルク文化の融合による新たなデザインの創出や、京都の職人が上海のアートフェスティバルに参加することで、日本の伝統技術が海外市場に進出する機会が増えている。

また、学術分野でも京都と上海の大学間の交流が盛んであり、京都大学と復旦大学の共同研究や、学生交換プログラムを通じて、若い世代の相互理解が深まっている。こうした教育機関を中心とした交流は、単なる観光を超えた、より持続的な文化理解へとつながる重要な要素となる。

さらに、近年のデジタル技術の発展により、オンラインを活用した文化交流の可能性も広がっている。例えば、京都の伝統工芸や料理のワークショップをオンラインで上海の人々に提供することで、物理的な距離を超えた新たな文化体験の場が生まれている。このような取り組みにより、日本文化への関心を持続させる役割を果たすと期待されている。

・まとめ

京都と上海は、それぞれ異なる歴史や文化的背景を持ちながらも、伝統を守りながら発展してきたという共通点を持つ。そのため、両都市の間には、観光だけでなく、芸術、食文化、学術、工芸など多様な分野での文化交流の可能性が広がっている。

今後の文化交流をより深化させるためには、単に一方の文化を紹介するだけでなく、双方が共創的な関係を築くことが求められる。例えば、京都の職人と上海のデザイナーが共同で新しいプロダクトを生み出すプロジェクトや、両都市の学生がオンラインで協力しながら文化研究を行う試みなどが考えられる。

また、文化交流の担い手として、若い世代の関与が重要となる。これからの時代、文化交流は単なる伝統の保存ではなく、新たな価値を生み出す場として

発展する可能性がある。そのため、京都と上海の相互理解を深めるための新しい取り組みを積極的に推進し、未来志向の文化交流を実現していく必要がある。京都府名誉大使として、私はこれらの文化交流の発展に寄与し、両都市の架け橋としての役割を果たしていきたいと考えている。

<名誉友好大使としての活動に関する考察と今後の展望>

氏 名：王子懿（オウスイ）
任 命 年 度：令和6年度任命
出 身 地：台湾
在 住 地：京都市在住



一、はじめに

令和6年6月から名誉友好大使としての活動を開始し、多くの国際交流や文化活動に参加してきた。元々、日本文化や国際交流に強い関心を持っており、これまでもボランティアとして様々なイベントに参加してきたが、大使として任命されてからは、より積極的に国際交流や文化普及活動に取り組むようになった。本報告では、令和6年6月からの活動を振り返り、その意義と成果について考察するとともに、今後の方向性についても述べる。

二、今までの活動の振り返り

1. 文化交流に関する活動

- ① 6月から数多くの文化交流活動に参加した。その中でも特に印象深かったのは、外国人向けの浴衣体験クラスでのボランティア活動である。日本の夏祭りの季節に合わせ、外国人観光客や留学生を対象に、浴衣の着付けを手伝うとともに、浴衣にまつわる文化的背景についても説明を行った。単なる着付けのサポートではなく、日本の伝統衣装の意味や祭り文化との関連性について伝えることができたのは貴重な経験であった。
- ② 7月には京都国際交流協会（kokoka）が主催する「PICNIK プロジェクト」の一環として、桂中学校を訪れ、台湾の文化や人権学習に関する授業を実施した。これは私にとって初めて日本の学校で講義を行う機会であり、準備にはかなりの時間を要した。特に、文化の違いをどのようにわかりやすく伝えるかを工夫し、視覚的なスライドや実際の体験を交えたプレゼンテーションを作成した。その結果、生徒たちから積極的な質問が寄せられ、文化交流の大切さを改めて実感した。

- ③ 9月には、宇治田原小学校を訪れ、2年生の子どもたちに台湾の文化を紹介する活動を行った。この活動では、台湾の伝統的な遊びを実際に体験してもらうことで、子どもたちが楽しみながら異文化を学べるよう工夫した。また、夏休みに帰省した際に持ち帰った台湾の小物を子どもたちに見せながら、台湾の暮らしについて説明を行い、国際理解を深める機会となった。
- ④ 11月には同志社高校を訪れ、人権学習の一環として台湾と日本の文化の違いについて講義を行った。講義では、自身の経験をもとに、多文化共生や異なる文化を尊重することの重要性について説明した。高校生たちは熱心に話を聞いており、質疑応答の時間には「異文化間の誤解をどのように解消すればよいか」などの積極的な質問が寄せられた。この活動を通じて、異文化理解の促進に貢献できたと感じた。

2. 京都に関する活動

- ① 10月から色々な京都に関連する活動に参加した。その中で、大使研修「お茶の京都バスツアー」に参加し、京都のお茶と台湾茶の違いについて学び、茶摘みやお茶に関する講座を通じて、深い理解を得ることができた。特に、かぶせ茶を異なる温度や回数で淹れることで、その味わいの変化を実際に体験できたことが印象深かった。また、農家を訪れ、九条ネギの梱包や芋掘りといった作業を体験する中で、京都が農産物やその伝統文化を大切に守り続けていることを強く感じることもできた。
- ② また、研修のため京都嵯峨鳥居本のミニツアーにも参加し、京都の文化財保存の取り組みについて学んだ。このツアーでは、嵯峨鳥居本町並み保存館や愛宕念仏寺を訪れ、日本の伝統的な町並み保存の現状を実際に体験した。愛宕念仏寺には千二百体の羅漢像があり、一つ一つ異なる表情を持つ仏像が印象的であった。嵯峨鳥居本の歴史や文化的意義を学ぶことで、京都がどのように文化遺産を保存し、次世代へ伝えているのかを深く理解することができた。
- ③ さらに、京都賞授賞式に参加し、受賞者がどのような分野で活躍しているのかを学び、その功績について理解を深めた。特に、授賞式の最後に行われた「手毬の贈呈」では、京都の子どもたちが手作りの手毬を受賞者に贈る場面があり、この伝統的な贈り物が持つ意味について考えさせられた。科学、芸術、技術といった異なる分野の研究が世界にどのような影響を与えているのかを知ることができ、自分自身も社会貢献の一助となる活動を続けていきたいと強く感

じた。

3. 書籍研究と日本語の研修

- ① 京都文化の理解を深めるため、『トップ通訳ガイドが伝える 京都案内の極意』という書籍を読んだ。本書では、京都の歴史や観光地について、ガイドの視点から詳しく説明されている。例えば、京都の人口や面積、平安京の成立、室町時代の文化、そして現代に至るまでの変遷についての記述があり、観光地を巡る際に歴史的背景を理解する助けとなった。

特に、西本願寺に関する記述は印象的であった。私は西本願寺の近くに住んでおり、たびたび訪れていたが、本書を通じて、浄土真宗の教えや西本願寺の宗教的な役割をより深く理解することができた。本堂の広さや仏像の配置が、庶民の信仰を支えるために設計されていることを知り、寺院の存在意義を再認識した。

- ② また、「留学生ビジネス日本語能力養成研修」にも参加し、日本での就職活動に必要なスキルやマナーを学んだ。この研修では、履歴書の書き方や面接対策に加え、日本の労働環境やビジネス文化についても学ぶことができた。特に、敬語の使い方や職場での円滑なコミュニケーション方法についての講義は、日本企業での働き方を理解する上で非常に有益であった。

三、自主活動に関連すること

夏の終わりに関西に住んでいる台湾人を集めて「手持ち花火体験」を行い、日本の伝統的な風習を直接体験してもらう機会を提供した。参加者には、線香花火の四変化（蕾、牡丹、松葉、散り菊）を紹介し、それぞれの美しさを楽しんでもらった。また、鴨川デルタでの花火体験は、夏の終わりの静けさと癒しを感じる特別なひとときとなり、参加者からは大変好評をいただいた。この活動を通じて、日本の文化や風情を深く理解することができた。

さらに、紅葉の季節には「野点体験」を開催し、日本人10名と外国人約20名が開催した。参加者は、野点でお抹茶と和菓子を楽しみながら、色鮮やかな紅葉を鑑賞し、日本の伝統的な茶文化に触れるとともに、自然の美しさを堪能した。美しい風景を共に楽しむ中で、京都の風物詩を実感できたことは非常に有意義だった。また、多くの参加者が京都の文化や風景に深い感動を覚え、異なる文化を持つ人々が一堂に会して共感を共有できたことに大きな喜びを感じた。

四、今後の展望

今後、講義だけでなく、さらに多様化し、さまざまな形態での活動依頼が増えることが望ましいと考えている。これにより、より幅広い国際交流の機会を得ることができ、時間が合えば積極的に参加し、京都府の文化や国際交流の発展に貢献したいと考えている。また、台湾と日本の交流活動を主催する意欲があり、これまでの経験を活かして、両国の文化や理解を深めるための活動を企画したいと考えている。

これまでの活動を通じて、関西在住の外国人を中心に京都の文化を直接体験してもらい、着物や抹茶、手持ち花火などを通じて、多くの好評を得ることができた。このような活動を通じて、参加者が京都に対する理解と愛着を深め、京都の文化の魅力を再発見できる場を提供できたことは、大きな成果であると感じている。今後は、京都府からの支援や広報サポートを受けられることで、さらに多くの国の人々が参加できるようになり、京都府が力を入れている文化保存や国際交流の取り組みをより広く知ってもらえると確信している。

今後もより充実した支援を得ながら、多くの楽しい活動を継続的に企画し、さまざまな国の方々と交流することで、京都の文化をさらに多くの人々に広めていきたいと考えている。また、活動を通じて、参加者同士の交流を深め、地域社会との連携を強化することを目指している。

<名誉友好大使として活動する中で考えたこと、感じたこと>

氏 名：咸雨欣（カン ウキン）
任命年度：令和6年度任命
出身地：中国遼寧省大連市
在住地：京都市



はじめに

2024年6月に、名誉友好大使に任命され、言語能力や留学生としての体験を使い、国同士の「架け橋」としての活動を開始した。その中で、様々な交流イベントや派遣活動に参加した。文化同士が交わる境界に立ち、それぞれが不器用に探り合いながら融合していく場面を何度も目の当たりにした。特別な経験が多くでき、とても楽しかった一方で、リキッド化する世界における「文化」のあり方について改めて考えさせられるきっかけにもなった。

特に日本では、少子高齢化対策の一環として「外国人労働者受け入れ政策」が緩和されつつあるが、これから日本で暮らす外国人も日本人も、まだまだ考えるべき課題が多いと感じた。

このレポートでは、文化交流の現場や留学生が体験する日本社会の現状を想像しやすくするために、私が大使としての活動を振り返り、そこで感じたことや考えたことを述べたいと思う。少しでも、これから必ず変化を迎える社会を、「文化」の面から考える材料となればと思う。

本文

まず、これまで名誉友好大使として参加した活動やイベントについて、その内容を簡潔にまとめるとともに、感想を述べたいと思う。

①2024年11月2日、全国社寺等屋根工事技術保存会からの依頼を受け、「ふるさと文化財の森 森が支える日本の技術 2024 公開セミナー」において、来場者の呼び込みや、外国人来場者の案内・通訳を担当した。

事前に行われた屋根工事技術保存会の紹介説明会では、技術保存会の役割や、屋根の制作・修復に使用される材料や道具、技法などについて説明を受けた。また、実際の作業場を見学させていただき、その後、屋根工事に関連する道具や模型、写真などが展示された空間を案内してもらった。特に印象深かったのは、建築分野ではAIやコンピューター製図が広く活用されている一方で、伝統技術の保存・継承においては依然として人の手が不可欠であるという点だった。しかし、そのような重要な技術でありながら、人材の確保が大きな課題となっていることが説明されていた。

イベント当日には、屋根作りを体験できるコーナーが設けられており、技術者の指導のもと、実際に屋根工事専用のハンマーを手に取り、竹で作られた釘を口に挟みな

がら、清水寺で使われているのと同じ屋根を作る体験ができる。実際、この体験や見学を通じて、日本人よりも外国の方々がより強い興味を示す場面が多く見られた。特に印象に残った例をいくつか紹介する。

まず、日本のゲームを通じて屋根作りに興味を持ち、実際に体験に訪れたベトナム出身の男性がいた。また、日本建築を専門としており、同行者にその知識を活かして体験を説明しながら楽しんでいた中国人女性も印象的だった。さらに、自国の人が日本の伝統文化を広めていることに驚きを感じていた外国人もいた。一方で、日本人の女の子の中には、親が呼びかけたにもかかわらず、ハンマーの使い方や普通のハンマーとの違いを自分で観察し、工夫して使い方を模索していた姿もあった。

このように、外国の方々が事前に知識を持っていたり、日本の伝統文化を自ら体験し、理解を深めようとする姿勢は、一般的な日本の成人よりも多いのではないかと感じた。こういったことから、伝統文化や技術の継承については、日本国内の住民だけでなく、外国の人々がその役割を担っていく可能性もあるのではないかと考えている。

② 続いては、日本の高校生による英語学習やグローバルネットワークの形成に関する二つのイベントを紹介したい。

一つ目のイベントは、2024年10月26日に開催された京都府 WWL 高校生サミットである。このイベントでは、SDGs をテーマに各自がリサーチを行い、最終的にプレゼン形式で発表することとなっていた。自分は、日本の高校生と他国の学生との議論が円滑に進むよう、ファシリテーターとしての役割を果たした。二つ目のイベントは、グローバルネットワーク京都による英語プレゼンテーション発表会である。こちらも SDGs をテーマに、参加者がリサーチ結果を発表し、その後、自分は英語での質疑応答を担当した。

どちらのイベントも、参加した高校生たちにとって、単なる英語学習にとどまらず、現代社会においてどのような価値観が求められているのかを考え、それに対して自分に何ができるのかを見つめ直すきっかけとなったのではと考えた。

印象に残った内容も多かったが、何よりも、初めて外国人とコミュニケーションを取る学生が少なくないと感じた。慣れない言語で相手に何かを伝えようとするものの、返ってくる反応は自分が普段使う表現とは異なる。それでも、彼らは戸惑いながら、普段とは異なる方法でコミュニケーションを試み、異なる国や立場の人々と議論を交わした。このような形式そのものが、高校生にとって貴重な経験となると強く思った。そのため、大使としてイベントに参加した自分は、ゆっくりと話しながら、ややパフォーマンス的ではあるが、大きくふるまって見せた。一方、高校生たちは、自分の言葉や表情、ジェスチャーを注意深く読み解きつつも、自分の表現に同化されるのではなく、日本人らしい英語や独自の身体表現を交えながら返答してきた。

日本での留学生活の中で、文化や言語が異なるとコミュニケーションが成立しないと考え、尻込みしたり諦めたりすることは少なくない。しかし、「違う」と感じたところを終点とするのではなく、高校生たちが自分と取ったコミュニケーションのように、相手との違いを認めつつも、それを解読し、異なる部分を保留したままお互いの存在を確かめ合うことこそが、多様な文化が存在する中での、より良いコミュニケー

ションの在り方なのではないかと考えた。

③ 京都府の公式ページに掲載される京都留学情報のブログ発信において、記事を9本執筆した。仕事内容は、「京都留学の魅力や役立つ情報をブログで発信する」というものである。その中で、自分はアートに特化した内容を執筆した。

具体的には、京都で開催される芸術祭や展覧会をはじめ、映画館や劇場などの文化施設を取り上げ、京都における芸術文化の魅力を、これから京都で留学する可能性のある人々に向けて発信してきた。ただ単に「こんなに面白い場所があるのでぜひ来てほしい」といった、消費を促すことだけを目的としたメッセージにはせず、体験したものの中には一言で「面白かった」と言い切れない、まだ発展途上にあるイベントや場所も積極的に紹介した。

それらが京都に存在する背景や理由を簡潔に説明し、自分自身が現地で感じたことを正直に記述した。そして、読者に対して単なる情報提供にとどまるのではなく、「これについて一緒に考えていけたら」という姿勢を意図的に示した。これは、京都での留学生生活をこれから迎えるかもしれない人々に対して、単なる観光客としてではなく、京都の文化やアートを共に見つめ、成長していく仲間として関わっていける未来への誘いでもある。

終わりに

自分が大使として活動した一年を振り返りながら、「異文化同士における文化の継承」「文化や言語の壁を残したまま行うコミュニケーションの姿勢」「異文化への向き合い方」という三つのテーマについて検討した。

まだ自分の考えは浅いかもしれないが、これからの文化の在り方について、ともに考えていける仲間が増えたらと願っている。

<異文化へのつながり>

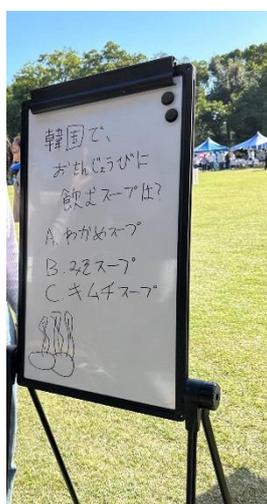
氏 名：崔 恵隣（チェ ヘリン）
任命年度：令和6年度
出身地：韓国
在住地：京都市在住



京都府名誉友好大使に任命され、様々な活動に参加させていただき、京都府の方々と前より接する機会が増えてそこから感じたことがある。それは、私が思ったより、日本人が異文化交流に対して拒否感がないことである。もちろん、自ら接しようとする積極的な姿勢は見えにくいですが、一応交流の場ができれば、そこで頑張っって異文化に触れようとする。私は、去年（2024年11月）に行われた京都府民フェスに参加させていただき、上記に述べたことを感じるようになった。

京都府民フェスでは、時間ごとに、クイズの解答に困っている人がいたらヒントを教える、母国に関する3択クイズを出題する、抽選を助ける、景品を渡す活動を交代にした。その中で、一番印象に残ったことは、3択クイズを担当したときである。私が出したクイズは、「韓国で、お誕生日に飲むスープは？」という問いで、選択肢には「A. わかめスープ、B. 味噌スープ、C. キムチスープ」の3択があった（下の写真）。この問いの答えは、「A. わかめスープ」だが、韓国はキムチが有名であるし、よく食べるイメージがあると思って「C. キムチスープ」を選ぶ人が多かった。ヒントをあげて正しい答えを教えたら、向こうから「なんで答えはわかめスープですか、他のスープはいつ飲みますか」などの質問が入ってくる。ただ答えだけ当てようとするのではなく、知らない異文化に積極的に接しようとする。異文化を教える側からはその質問はすごくうれしいことだった。異文化に触れることで、新しいことがわかり、それが異文化に対しての興味がますます増えるのだと思うからである。

以上で、日本人が消極的な姿勢を取るのには、おそらく異文化に接する機会があまりないだけで、もっとその機会を増やせば、より日本が異文化の共存する国になるのではないかと思う。



<ベトナムの言語について>

氏 名：Trần Thị Trúc Linh
(チャンティツックリン)

任命年度：令和6年度任命

出身地：ベトナム

居住地：京都市在住



よく見落とされますが、私の母国ベトナムは、日本と同じ漢字文化圏の一つです。

ベトナム語と日本語の一番の共通点は漢字です。昔のベトナムも、日本と同じく、漢字を公用の表記として使いました。18世紀末に、日本の商売人の船が台風で遭難して、当時の安南国つまりベトナムに流された際、言葉が全く通じず、困り果てたようですが、漢字の筆談で会話が成立しました。そういったエピソードは日本の『南瓢記』という本に記録されました。さらに時間を遡ると、徳川幕府と安南国の手紙のやり取り、長崎の商人荒木宗太郎がベトナムの姫を娶ったなど、交流が結構ありました。もしかして共通の言葉があったからこそ、両国の交流がスムーズにできたかもしれません。

現代のベトナム語と日本語の表記は異なる方向へ変わってしまいましたが、語彙の中に漢語が大きな割合を占めるという共通点はまだあります。共通の漢語も沢山あり、例として「感動」という言葉をあげましょう。意味は同じですが、日本語では「カンドウ」と読み、表記は漢字のままです。ベトナム語では「カムドン」と読むので、音は日本語とあまり変わりません。しかし、現代ベトナム語の表記は「cảm động」になります。つまり、現代ベトナム語では、漢語は音としか残っていないことが伺えます。

その理由は、ベトナムの歴史にあります。1600年代に、ポルトガルやフランスの宣教師はキリスト教を布教するために、ベトナム語をローマ字で表記することを試みました。その結果が現代のベトナム語の表記です。また、当時のベトナムはフランスに侵略され、フランス語の教育をしやすいし、植民地を統治するために、フランス人はローマ字の普及を促しました。ローマ字の方が覚えやすいし、浸透するには時間がかかりませんでした。その後、侵略から解放されても、ベトナム政府は公用表記として採用しました。

では、ベトナム人は自国の言葉を表記するために、文字を作らなかったのか、という疑問が浮かびます。日本では、片仮名と平仮名が作られました。先に作られたのは片仮名で、漢籍、つまり仏典などを読むためのものでした。その後、平仮名が作られ、和歌・物語など、王朝文学が花を開きました。片仮名と平仮名の他に、「峠」「畑」など和字（和製漢字）があります。ベトナム語でも、その試みはありました。しかし、言語の構造が違うので、文字の発展も違います。

ベトナム語では、片仮名と平仮名に当たるものはありませんが、和字に当た

るものは作られました。「字喃」(チュノム)というものです。わかりやすく例えると、日本語の漢字仮名交じり文のように、字喃文は、漢語は漢字そのまま、ベトナム語は「字喃」で表記されました。『チュノム』は漢字のように、表意文字のため、言葉の一つ一つに文字があるので非常に複雑です。次の画像は、字喃の一つです。その意味を当ててみてください。答えは次に明かします。

婁

字喃は長い間作られてきましたが、漢字のように勉強するのが非常に難しく、統一性が低く、理由は諸々ですが、普及できる前に、使われなくなってしまいました。現代のベトナム人は漢字、字喃そのものを殆ど知りません。文字が使われなくなったため、漢語も音としてしか残っていません。

ここで上記に取り上げた字喃の意味を明かしますが、この字喃は「母」を表す文字でした。言葉と文字には国の歴史背景、人の考え、文化そのものが刻まれています。国によって見える世界が違います。ローマ字は勉強しやすいから識字率を一気にあげたのは良いことかもしれませんが、文化の一部がなくなったのと同じなので、残念でなりません。

近年になると、字喃を復興しようとする若者もいますが、公用表記にできない以上、容易ではないでしょう。それでも、これ以上失われないように、古文獻にだけ残されないように、字喃を沢山の人が知ってもらえる方法を見つけたらいいなと思います。

<韓国人にとって京都とは：遺産観光の観点から>

氏 名：朴 智恵（パク ジヘ）
任 命 年 度：令和6年度任命
出 身 地：大韓民国・ソウル特別市
在 住 地：京都市在住



学期中にキャンパスを歩いていると、韓国人家族や韓国から修学旅行に来た学生に簡単に出会うことができる。彼らは一様に、キャンパスの奥にある同志社大学出身の詩人である尹東柱（ユン・ドンジュ）、鄭芝溶（チョン・ジヨン）の詩碑に向かっている。

この詩碑は、尹東柱詩人没後50周年だった1995年2月、同志社大学在日同胞卒業生と「同志社交友会コリアクラブ」（現同志社コリア同窓会）、そして「尹東柱を追悼する会」が主導して建てられたものである。詩碑には尹東柱の代表的な詩である「序詩」が詩人の自筆原稿の筆跡で刻まれている。そこに訪れた韓国人は詩碑の前に献花し、黙祷を捧げ、彼を称える。



（本人撮影）同志社大学の「尹東柱詩碑」の様子

上述のように韓国人にとって尹東柱詩碑は単なる観光地ではなく、深い文化的意味と歴史的価値を持つ場所として位置づけられている。尹東柱は当時の韓国人を文学的に代表する重要な人物として記憶されており、彼の詩碑は彼が残した文学的遺産を称える意味を持つ。韓国人は日本で彼の詩を通して、時代の苦難を思い起こし、多くのことを感じる。

京都は日本の伝統的な首都であり、日本の歴史と文化の中心地であるだけでなく、韓国と日本の複雑な歴史的関係が絡み合っている重要な都市である。韓国人観光客は京都で日本の文化と歴史を体験し、そこで痛ましい歴史の瞬間を思い出し、韓国人のアイデンティティを改めて振り返ることになる。京都の歴史的建築物や文化遺産、そして尹東柱詩碑のような象徴的な場所は、日本との関係を振り返る重要な機会を提供する。

したがって、京都は単に日本の伝統的な観光地にとどまらず、韓国と日本の間の歴史的教訓を思い起こすことができる場所として、遺産観光の重要な目的地となっている。京都での遺産観光（ヘリテージツーリズム）を通じ、韓国人には彼らの歴史的アイデンティティを再考させ、京都はこれらの観光客の訪問を通じて経済的・文化的な成長を続けている。

『参考文献』

- ・李元重「同志社大学における尹東柱詩碑建立の経緯と意義」『同志社談叢第39号』（2019）

<大使活動を通して得た体験>

氏 名：莫雪梅（バク セツバイ）
任 命 年 度：令和6年度任命
出 身 地：中国四川省
在 住 地：京都市在住



この一年間、私は京都府名誉友好大使として、さまざまな活動に参加し、多くの貴重な経験を積むことができました。京都の美しい自然や歴史的な景観を感じる自然文化体験活動、歌舞伎や能楽、狂言、近代日本名画などの伝統文化を深く学ぶ機会、そして日本の小学校、中学校、高校を訪れ、自分の国や故郷の文化を紹介する文化交流活動など、どれもが私にとって意義深いものでした。これらの活動を通じて、私は文化交流の意義について深く考えるようになり、自分自身の視野を広げることができました。

まず、京都の自然文化体験活動では、四季折々の美しい景色や歴史的な建造物に触れ、日本の自然と文化がどのように調和しているかを実感しました。例えば、春には桜の名所を訪れ、秋には紅葉の美しい井手町を巡りました。これらの体験を通じて、京都が持つ独特の風情や、自然と人間の営みがどのように結びついているかを学びました。また、京都の町並みや庭園のデザイン（無鄰庵）からは、日本人の美意識や自然に対する敬意が感じられ、それが長い歴史の中でどのように形作られてきたかを考えるきっかけとなりました。

次に、伝統文化体験では、歌舞伎や能楽、狂言といった日本の古典芸能に触れることができました。これらの芸能は、単なるエンターテインメントではなく、深い精神性や哲学が込められていることを知りました。特に、能楽には人間の感情や自然のものが象徴的に表現されており、その奥深さに感銘を受けました。また、近代日本名画の鑑賞を通じて、日本の美術がどのように西洋の影響を受けながらも独自のスタイルを確立してきたかを学び、文化の融合と進化について考えることができました。

さらに、日本の学校を訪れ、自分の国や故郷の文化を紹介する活動は、私にとって特に印象深いものでした。小学生から高校生まで、さまざまな年齢層の生徒たちと交流する中で、彼らが異文化に対してどのような興味や疑問を持っているかを知ることができました。例えば、私の国の伝統的な中国衣装や食文化について紹介すると、生徒たちは目を輝かせて質問を投げかけてくれました。その反応を通じて、文化交流が単に知識を伝えるだけでなく、相手の好奇心を刺激し、新たな視点を提供するものであることを実感しました。

これらの活動を通じて、私は文化交流の意義について深く考えるようになりました。文化交流とは、異なる文化を知るだけでなく、その背景にある歴史や価値観を理解し、互いに尊重し合うことだと思います。例えば、京都の伝統芸能を体験する中で、その芸術が持つ深い精神性や、長い歴史の中で培われた技

術の素晴らしさを実感しました。また、日本の学校で自分の国の文化を紹介する際には、生徒たちの新鮮な反応や興味深い質問を通じて、自国の文化を改めて見つめ直すことができました。

さらに、これらの活動は、私自身の視野を広げ、異文化に対する理解を深める貴重な経験となりました。特に、日本の伝統文化と現代文化がどのように共存し、発展しているかを目の当たりにし、文化の継承と革新のバランスの重要性を学びました。また、日本の教育現場での交流を通じて、若い世代が異文化に対してどのように興味を持ち、学びを深めているかを知ることができ、未来の国際交流の可能性を感じました。

このような経験を通じて、私は文化交流が単なる知識の交換ではなく、人と人との心のつながりを築くものであることを強く実感しました。文化交流は、異なる背景を持つ人々が互いの違いを認め合い、共感し合うことで、新たな理解と信頼を生み出すプロセスです。これからも、京都府名誉友好大使として、さらなる文化交流の機会を創出し、両国の相互理解と友好関係の深化に貢献していきたいと思います。

最後に、この一年間の活動を通じて、私は自分自身の成長を実感しました。異文化に触れることで、自分の価値観や考え方が広がり、新たな視点を得ることができました。また、日本の皆さんとの交流を通じて、友情や信頼を築くことができ、それが私の人生にとってかけがえのない財産となりました。これからも、文化交流を通じて、世界中の人々とつながり、共に学び、成長していきたいと思います。

＜人と出会い、視野を広げる＞

氏 名：ハミド アブドウル ファウザン
任 命 年 度：令和6年度任命
出 身 地：インドネシア・ジャカルタ
在 住 地：京都市在住



友好大使として、私は「架け橋」となり、異なる背景を持つ人々をつなぐ多くのイベントに参加する機会に恵まれた。このようなつながりは、私の日本留学のきっかけにもなったので、常に大切にしてきた。京都に住むすべての人が、このようなつながりの恩恵にあずかれることを願っている。

私のストーリーも異なる人生を生きる人々との出会いから始まった。高校2年生になるまで、留学など想像したこともなかった。私の目標は、公立高校に通う多くの友人たちと同じように、インドネシアの大学に進学し、医学や工学を学ぶことだった。ところがある日、シンガポールにキャンパスツアーに行く機会があった。そこで私はインドネシアの学生に会い、大学が学生の自主プロジェクトを大いに支援していることや、ノーベル賞受賞者がキャンパスで講義をしていることを知った。留学を目指すべきだと思った瞬間だった。それから早1年、私は京都大学の学生になった。

友好大使としての最初の1年間は、人と人をつなぐさまざまなイベントに参加させていただいた。7月には鳥羽高校に行き、英語を学び海外に行くことに興味を持っている多くの日本人生徒と出会った。10月には、日本人とオーストラリア人の生徒が集う高校サミットに参加した。その場に座り、活発な議論を交わす生徒たちを見て、「これは生徒たちにとって、別の生き方を知るいい機会だ」と思った。生徒たち自身がどう感じたかはわからないが、少なくとも彼らのうちの誰かが、視野が広がり、自分の人生でも何か違うことができると気づく、そんな変容の瞬間を体験してくれたらと思う。

私は4月から日本を離れるが、この友好大使プログラムが継続され、さまざまな背景を持つ人々がつながっていくことを願っている。

<韓国 の 社会問題 : 自殺にどのように向き合うべきか>

氏 名 : HONG SARANG (ホンサラン)
任 命 年 度 : 令和 6 年度任命
出 身 地 : 韓国
在 住 地 : 京都市在住



韓国 の 一 番 大 き い 川 で あ る 「 漢 江 (ハ ン ガ ン) 」 に は 、 数 多 く の 橋 が 建 て ら れ て い る 。 四 年 前 ま で 、 漢 江 の 橋 の 手 す り に は 、 「 す ご く し ん ど か っ た よ ね 」 「 全 て の つ ら い 瞬 間 は 流 れ て い く で し ょ う 、 ま さ に あ の 川 の 水 の よ う に 」 と い っ た 標 語 が 書 か れ て い た 。 な ぜ 、 こ の よ う な 標 語 が 橋 の 手 す り に 書 か れ て い た の だ ろ う か 。 ま た 、 こ の 標 語 は 何 を 意 味 し て い た の か 。 本 レ ポ ー ト で は 、 韓 国 の 自 殺 問 題 の 現 状 を 紹 介 し た 上 で 、 自 殺 率 の 高 い 原 因 を 言 及 し 、 従 来 の 解 決 策 に 触 れ た 上 で 、 今 後 の 方 向 性 に つ い て 考 察 す る 。

2021 年 の 経 済 協 力 開 発 機 構 (OECD) の デ ー タ に よ る と 、 韓 国 の 自 殺 率 は OECD の 加 盟 国 の 中 で 圧 倒 的 に 一 位 で あ る こ と が わ か る 。 韓 国 の 自 殺 率 は 2000 年 か ら 急 増 し 、 現 在 ま で 約 17 年 間 に わ た っ て 一 位 を 維 持 し て い る 。 特 に 問 題 と な っ て い る の は 、 10 代 か ら 30 代 の 自 殺 率 が 急 激 に 増 加 し て い る 点 で あ る 。 10 代 か ら 30 代 の 死 因 の 一 位 が 自 殺 で あ り 、 ガ ン や 交 通 事 故 よ り も 多 い 。

韓 国 の 高 い 自 殺 率 の 原 因 と し て は 、 経 済 的 負 担 や 学 校 や 職 場 で の 圧 力 が 挙 げ ら れ て い る 。 そ れ に 加 え て 、 う つ 病 を 抱 え な が ら 助 け を 求 め る こ と を 恥 ず か し い と 感 じ 、 治 療 を た め ら う 傾 向 も 原 因 の 一 つ と 考 え ら れ て い る 。

こ の よ う な 高 い 自 殺 率 を 減 少 さ せ る た め 、 韓 国 で は 様 々 な 対 策 が 工 夫 さ れ て い る 。 最 近 の 対 策 の 一 つ と し て 、 自 殺 相 談 の 改 善 が 挙 げ ら れ る 。 韓 国 で は 、 自 殺 に 関 す る 相 談 が 必 要 な 際 に 、 「 1393 」 に 電 話 を か け 、 手 伝 っ て も ら う こ と が で き る 。 こ れ は 日 本 の 「 110 」 や 「 119 」 の よ う に 緊 急 事 態 に よ く 使 わ れ る 。 し か し 、 電 話 番 号 が 思 い 出 し に く い と い う 意 見 が 挙 げ ら れ 、 今 年 か ら 「 109 」 に 変 わ る こ と に な っ た 。 「 109 」 は 「 一 人 も 自 殺 な く 救 出 す る 」 と い う 意 味 を 込 め て 作 ら れ た 番 号 で あ る 。 ま た 、 現 在 は 漢 江 の 橋 の 手 す り に あ っ た 標 語 は 全 部 撤 去 さ れ た 。 こ れ は 、 標 語 が か え っ て こ の 橋 を 自 殺 の 名 所 と し て 有 名 に し 、 自 殺 防 止 に は 効 果 が な い と 判 断 さ れ た た め で あ る 。 標 語 の 代 わ り に 現 在 は 高 い フェ ンス が 設 置 さ れ て い る 。 こ の フェ ンス に は AI の セ ン サ ー が 活 用 さ れ て い て 、 橋 か ら 飛 び 降 り よ う と す る 人 が い る と 、 消 防 士 が す ぐ に 駆 け つ け て 救 出 で き る 仕 組 み に な っ て い る 。

し か し 、 様 々 な 対 策 が 行 わ れ て い る に も か か わ ら ず 、 韓 国 の 自 殺 率 は 依 然 と し て 高 い ま ま で あ る 。 現 状 で は 、 貧 富 の 格 差 、 競 争 的 な 社 会 の 雰 囲 気 、 男 女 や 世 代 間 の 葛 藤 な ど 、 自 殺 の 根 本 的 な 原 因 を 解 決 す る こ と が 大 事 で は な い か と 思

う。

では、日本の自殺率はどうかだろうか。OECD のデータによると、韓国、リトアニア、スロベニアと続き、日本の自殺率は 4 番目に高い。また、世界保健機関 (WHO) のデータによれば、日本の自殺率は主要先進 7 カ国 (G7) の中で最も高いとされている。しかし、韓国で自殺率の問題が注目される以前から、日本ではすでに自殺率の問題への対策が講じられ、対応が進められていた。近年、韓国も自殺を社会問題として真剣に捉え、対策を進めようとしているが、まだ十分とは言えない。特に体系的な対策や心理相談のプロセスに関しては、日本から学べる点が多い。同じ生活様式や類似した文化を共有している日本から参考にできることは多いだろう。

日本と韓国は、自殺問題にどのように向き合うべきか。両国の構造的な相違点を分析し、対策の接点を見出すなど、より幸福な社会の実現に向けた研究が今後ますます重要になると考えられる。

【参考文献・引用サイト】

OECD. “Suicide rates” . 2024-12-23

<https://www.oecd.org/en/data/indicators/suicide-rates.html>

(参照 2025-02-09)

<名誉友好大使として活動する中で考えたこと、感じたこと>

氏 名：Moe Thant Syn（モーテッシン）

任命年度：令和6年度任命

出身地：ミャンマー

居住地：京都市在住



名誉友好大使としての活動を通じて、日本とミャンマーの文化交流の重要性を改めて実感しました。特に、高校訪問や文化交流イベントに参加することで、両国の若者が互いの文化に興味を持ち、理解を深める機会を提供できたことは大変貴重な経験でした。文化の違いを超えて、共通点を見出し、お互いに学び合うことの大切さを感じました。

竹の伝統イベントに参加した際には、地域の方々と深く交流する機会がありました。日本の伝統文化に触れることで、ミャンマーの文化との共通点や相違点を考えるきっかけとなりました。特に、地元の方々の温かさや、伝統を大切にしている姿勢には感銘を受けました。このような活動を通じて、文化を守りつつも新しい価値を創造することの重要性を学びました。

また、名誉友好大使として活動する中で、日本とミャンマーの架け橋となるためにできることはまだ多くあると感じています。例えば、留学生として日本での経験を SNS を通じて発信し、日本で学びたいと考えるミャンマーの若者に向けて情報提供を行うことも重要な役割の一つだと思います。私自身、日本での生活を通じて学んだことを活かし、文化の違いを理解し、相互理解を深めるための活動を続けていきたいと考えています。

さらに、名誉友好大使としての活動を通じて、異文化交流の重要性を強く感じました。日本とミャンマーは地理的に離れていますが、文化や価値観の中には共通点が多く、理解を深めることでより強い絆を築くことができます。私は今後も、異文化間の架け橋となるような活動を積極的に行い、両国の友好関係の発展に貢献していきたいと考えています。

出身地について（紹介したいもの、場所、文化など）

私の出身地であるミャンマーは、多様な文化と歴史を持つ国です。特に、バガン遺跡群は世界的に有名で、数千もの仏塔が点在する壮大な風景が広がっています。また、ミャンマーの伝統的な食文化も魅力的で、「モヒンガー」という魚のスープ麺や、「ラペットゥ」という発酵茶葉のサラダが親しまれています。さ

らに、人々の温かいおもてなしの心や、お祭りの際に見られる伝統舞踊や音楽も、私が誇りに思う文化の一つです。



バガン遺跡群



「モヒンガー」という魚のスープ麺



「ラペットウ」という発酵茶葉のサラダ

出身地の人々から見た「京都」について

ミャンマーの人々にとって、日本は発展した国であり、特に京都は歴史と文化が息づく場所として憧れの都市です。京都の美しい寺院や神社、紅葉や桜の風景は、多くのミャンマー人にとって「一度は訪れたい場所」として知られています。また、日本の伝統文化である茶道や着物にも関心を持つ人が多く、京都はまさに「日本の文化を体験できる都市」として認識されています。特に、京都の町並みや古き良き建築様式は、ミャンマーの伝統的な建築と通じるものがあり、親しみを感じる人も多いです。

ミャンマーの人々の間では、日本の礼儀正しさや時間の厳守、公共の場でのマナーの良さが話題になることがあり、京都の静かで整然とした街並みは、日本らしさを象徴するものとして認識されています。さらに、ミャンマーでは仏教文化が根付いているため、京都の寺院巡りや仏教行事に対しても強い興味を抱く人が多いです。こうした背景から、京都は単なる観光地ではなく、精神的にも共感を覚える場所として、ミャンマーの人々の間で特別な存在となっています。

京都の伝統文化は、ミャンマーと共通する部分も多くあります。例えば、仏教を中心とした精神的な価値観や、伝統工芸へのこだわり、家族や地域との強いつながりなどです。ミャンマーでは手作業による工芸品が多く作られており、京都の職人技と共通する点が多いです。また、京都の四季折々の景色を楽しむ文化は、ミャンマーの人々にも深い感動を与えます。特に、紅葉や桜の季節は、ミャンマーの人々にとっても特別な魅力があり、日本を訪れる大きな理由の一つとなっています。

<故郷の味>

氏 名：李明（リ ミン）
任 命 年 度：令和6年度任命
出 身 地：中国山東省
在 住 地：京都市在住



私は山東省微山湖のほとりにある小さな町で生まれました。幼い頃から大人たちが湖にまつわる話をするのを聞いて育ち、湖の恵みを味わいながら成長しました。子供の頃は当たり前だった食べ物も、故郷を離れて初めてその珍しさに気づき、今では懐かしい故郷の味として心に残っています。

例えば、私たちがよく食べていた「四孔鯉（しかな）」は、4つの鼻孔を持つことで知られています。しかし、実際に機能するのは2つだけで、残りの2つは短いヒゲのくぼみによってできたものです。地元では、この鯉はもともと黄河に生息しており、黄河の水には砂が多いため、呼吸を助けるために鼻孔が増えたのだと言われています。しかし、その後、黄河の流れが変わり、微山湖に留まることになったというのです。地元の人々は、どんなことにも独自の解釈を持ち、それがまた土地の魅力にもなっています。

魚は中国の食文化において、富や繁栄の象徴とされています。春節（旧正月）には、どの家庭でも年夜飯（大晦日のごちそう）に魚を用意し、「年年有余」（年々豊かになる）という縁起の良い願いを込めます。故郷では魚料理の種類も豊富で、蒸し魚や油淋魚（揚げ魚）などが一般的ですが、私が最も恋しく思うのは、地元特有の「真珠魚丸（しんじゅぎょがん）」と「活魚鍋貼（かつぎょなべやきぎょうざ）」です。この二つは、故郷に帰らなければ味わえない特別な料理です。

「真珠魚丸」は、かつて国家級の料理人が考案したと言われています。私が初めて食べたのは小学生の頃で、もちろん作ったのはその料理人本人ではなく弟子たちでしたが、それでも驚くほど美味しかったのを覚えています。すべての魚丸（フィッシュボール）は小さく均一なサイズで、まるで真珠のように美しく、スープの表面に整然と浮かんでいます。一口食べると、魚の旨味が口いっぱいになり、その美味しさは言葉にできません。

「活魚鍋貼」は、家の近くの朝食屋台でよく食べたものです。あまりに身近すぎて、特別な料理とは思っていませんでした。しかし、昨年帰省した際、屋台の前には長蛇の列ができていて、調べてみるとすでに有名なグルメスポットになっていました。冬の朝、パリッと香ばしい鍋貼（焼き餃子）を数個、そしてアツアツの魚肉糝湯（ぎょにくさーたん）を一杯——その温もりに包まれなが

ら、一日を幸せにスタートすることができます。

どんなに故郷を離れても、私たちは「故郷の味」を忘れません。遠く離れるほどに、あの味がより鮮明に蘇ってくるのです。人それぞれの人生は異なりますが、美食は国や文化を超え、人々の心を癒す共通の力を持っています。人生のプレッシャーに押しつぶされそうな時、たった一皿の料理が、私たちを救い、再び前を向かせてくれることもあるのです。困難に直面し、落ち込んだ時こそ、美味しいものを食べて元気を取り戻し、また前へ進めますように。

<南昌と京都：異なる歴史、共通する魅力>

氏 名：梁 雨桐（リョウ ウトウ）
任 命 年 度：令和6年度任命
出 身 地：中国江西省南昌市
在 住 地：京都市在住



私のふるさと・南昌について

私のふるさととは、中国の南昌（なんしやう）という都市です。歴史が深く、美しい自然と豊かな文化に恵まれています。特に有名なのが、「滕王閣（とうおうかく）」という歴史的な建物です。

滕王閣は、中国の「三大名楼（さんだいめいろう）」の一つに数えられています（名楼とは、歴史的価値の高い美しい建築のことを指します）。唐の時代の詩人・王勃（おうぼつ）は、『滕王閣序（とうおうかくじょ）』という文章の中で、滕王閣の壮麗な景色と風雅な雰囲気を見事に描き出しました。この文章は、中国文学史においても名文として高く評価されており、滕王閣の美しさを広く世に知らしめるきっかけとなりました。

南昌と京都の共通点と違い

南昌と京都には、いくつかの共通点と違いがあります。どちらも長い歴史を持ち、伝統的な建築や文化財が多く残っている都市です。ただ、町並みには大きな違いが見られます

京都では、神社や寺院をはじめとする木造の伝統建築が多く残されており、街全体が歴史の趣を感じさせます。一方、南昌では近年都市開発が進み、古い街並みと現代的な建築が共存しています。

食文化にも違いがあります。京都の料理は繊細な味付けと美しい盛り付けが特徴で、旬の食材を活かして素材本来の味を引き立てることを重視しています。それに対して、南昌の料理は辛味が強く、特に唐辛子や香辛料をふんだんに使った料理が多いのが特徴です。南昌の人々は、豊かな風味と刺激的な味わいを求めており、その料理は多くの人に親しまれています。

南昌の人々にとって、京都は「伝統と文化を大切にしている都市」というイメージがあります。特に、京都の歴史的な町並みや文化財の保存活動は、多くの人に感銘を与えています。南昌も歴史ある都市ですが、近年の急速な発展の中で、伝統を守りながら発展していくことが大きな課題となっています。

文化交流の大切さ

私が京都府名誉友好大使として活動する中で、文化交流の楽しさと重要性を実感しています。異なる文化を持つ都市と交流することで、新しい発見や友達を作り、お互いの魅力を深く理解できると思います。特に、日本と中国は歴史

的に近い関係にあり、互いの文化を知ることが重要です。

京都には、金閣寺や清水寺などの美しい観光地や、伝統的な和菓子など、訪れる人々を魅了するものがたくさんあります。私はこれらの文化を SNS で紹介し、中国の人々にも京都の魅力を知ってもらえるよう努めています。また、友人を京都に招待して一緒に観光したり、日本の伝統料理を楽しんだりすることで、より多くの人にこの素晴らしい文化を体験してもらいたいと考えています。

今後も、京都の魅力を広めながら、他の都市とのつながりを大切に、中国と日本の理解を深める活動を続けていきたいです。



「滕王閣」の写真、画像出典：

<https://p2.img.cctvpic.com/photoworkspace/2021/09/18/2021091816451388958.jpg>



京都府

京都府国際課

Tel : 075-414-4316 FAX : 075-414-4314

E-mail : kokusai@pref.kyoto.lg.jp

☆友好大使の活動や友好大使が感じた京都留学の情報を
発信しています。

京都留学情報 <http://studykyoto.wordpress.com/about/>



京都府名誉友好大使自主活動実行委員会ブログ

<http://kpfa1992.blogspot.jp/>

京都府名誉友好大使友好大使 facebook

<https://facebook.com/KPFA1992>